

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXIII

泉南市文化財調査報告書 第四十六集

2006. 3

泉南市教育委員会

正誤表

頁	誤	正
12	註23 大阪府■育委員会 【■=文字潰れ】	大阪府教育委員会
19・20	ノブルが連続しない 【…18・20・19・21…となっている】	本文、ノブル共に表裏逆

『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXIII』

序 文

泉南市は、大阪府南部に位置し、北西を大阪湾、南東を和泉山脈に囲まれ、一年を通して温暖な気候条件を有する豊かな自然環境に恵まれています。このため、市内には先人たちによって残された数多くの遺跡が存在しています。

しかし、近年の関西国際空港の開港及びそれらに伴う周辺の様々な開発等によりその姿を大きく変貌させてきました。それは私たちの日々の生活を物質的に豊かにしてくれることとなった一方で古代から残されてきた我々祖先の豊かな自然を大きく変化させ、過去の文化を現代に生きる我々に見えにくいものとしてしまいました。埋蔵文化財の発掘調査は、まさにこれら先人の残した文化を現代によみがえらせる近道のひとつといえるでしょう。

本市ではこれらを保護し未来に伝えていくという責務を果たすため、緊急発掘調査を随時おこなっており、その成果をいち早く『泉南市遺跡群発掘調査報告書』という形で公表させていただいております。本書により文化財保護と研究の進展を期待すると同時に今後ともより一層の充実した文化財保護行政をおしすすめていく所存です。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地元土地所有者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々には、深く感謝の意を述べさせていただきますと同時に、今後とも本市の文化財行政により一層のご理解、ご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成18年3月

泉南市教育委員会
教育長 梶本邦光

例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成17年度国庫補助事業として計画し、生涯学習課が実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会生涯学習課、石橋広和・城野博文・河田泰之を担当者とし、平成17年4月1日に着手し、平成18年3月31日に終了した。なお、本書に掲載している内容は、平成17年1月1日から平成17年12月31日までのものである。
3. 現地調査及び整理の実施にあたっては江尻美代子、蒲生徹幸、蔵田弘幸、富 愛、藤野 渉、真鍋紀美子諸君らの協力を得た。
4. 本書の執筆は第1章を石橋が、第2章第4節を河田が行い、その他は城野が行った。編集は城野が行った。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は城野が行った。
6. 調査における出土遺物及び図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを望むものである。

凡 例

1. 各調査区には個別の番号を付した。番号の構成は、「遺跡略称－調査年度－通し番号」である。遺跡略称は、男里遺跡－ON、岡中西遺跡－OKW、岡田遺跡－OKD、北野遺跡－KT、上村遺跡－KM、石ヶ原遺跡－IHである。調査年度は西暦の上位2桁を省略して表記している。
2. 図中の方位は、PL. 1・2では真北を、各調査区位置図・地形図では国土座標VI系にもとづく座標北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。
3. 図版中に示したレベル高は、T.P. + (m) の数値を使用しているが、T.P. + は省略している。
4. 本書で扱う地形分類図は、豊田兼典氏が作成した。(PL. 2)
5. 遺構名称は、遺構の種類を表すアルファベットと任意の数列の組合せで表記している。本書にて扱う遺構の種類はSE－井戸、SD－溝、SK－土坑である。
6. 図示した遺物の断面は、土師器－白抜き、須恵器及び灰釉陶器－黒塗り、瓦器及び瓦質土器－トーンのように区分している。
7. 遺物番号は、遺跡毎に通し番号を付し、遺跡略称を冠している。遺物実測図と写真図版において遺物番号は統一している。

目 次

第1章 調査の経過	1
第2章 男里遺跡の調査	5
第1節 既往の調査	5
第2節 05-1区の調査	7
第3節 05-2区の調査	8
第4節 05-3区の調査	9
第5節 05-4区の調査	10
第6節 05-5区の調査	10
第7節 04-5区の調査	11
第3章 岡中西遺跡の調査	13
第1節 既往の調査	13
第2節 05-1区の調査	13
第3節 04-1区の調査	14
第4章 岡田遺跡の調査	16
第1節 既往の調査	16
第2節 05-1区の調査	16
第3節 05-2区の調査	17
第5章 北野遺跡の調査	19
第1節 既往の調査	19
第2節 05-1区の調査	19
第3節 04-2区の調査	21
第4節 04-3区の調査	21
第6章 上村遺跡の調査	24
第1節 既往の調査	24
第2節 05-1区の調査	24
第7章 石ヶ原遺跡の調査	26
第1節 既往の調査	26
第2節 05-1区の調査	26
第8章 まとめ	28
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図 男里遺跡調査区位置図	6
第2図 男里遺跡05-1区地形図	7

第3図	男里遺跡05-2区地形図	8
第4図	男里遺跡05-3区地形図	9
第5図	男里遺跡05-4区地形図	10
第6図	男里遺跡05-5区地形図	11
第7図	男里遺跡04-5区地形図	11
第8図	岡中西遺跡調査区位置図	13
第9図	岡中西遺跡05-1区地形図	13
第10図	岡中西遺跡04-1区地形図	14
第11図	岡田遺跡調査区位置図	16
第12図	岡田遺跡05-1区地形図	16
第13図	岡田遺跡05-1区出土遺物	17
第14図	岡田遺跡05-2区地形図	18
第15図	北野遺跡調査区位置図	19
第16図	北野遺跡05-1区・04-2区・04-3区地形図	20
第17図	北野遺跡05-1区出土遺物	20
第18図	北野遺跡04-3区出土遺物	22
第19図	上村遺跡調査区位置図	24
第20図	上村遺跡05-1区地形図	25
第21図	石ヶ原遺跡調査区位置図	26

表 目 次

第1表	平成17年発掘および試掘調査届出一覧表	2
第2表	発掘調査一覧表	3
第3表	試掘調査一覧表	4
第4表	立会調査一覧表	4
第5表	文化財一覧表	30

図 版 目 次

PL. 1	泉南地域の文化財
PL. 2	泉南地域の地形分類
PL. 3	男里遺跡、岡中西遺跡、岡田遺跡①調査区
PL. 4	岡田遺跡②、北野遺跡、上村遺跡、石ヶ原遺跡調査区
PL. 5	男里遺跡05-1・2区
PL. 6	男里遺跡05-3・4・5区
PL. 7	男里遺跡04-5区、岡中西遺跡05-1・04-1区

- P L. 8 岡田遺跡05-1・2区
- P L. 9 北野遺跡05-1、04-2・3区
- P L. 10 上村遺跡05-1区、石ヶ原遺跡05-1区
- P L. 11 岡田遺跡05-1区、北野遺跡05-1区出土遺物
- P L. 12 北野遺跡04-3区出土遺物

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXIII

第1章 調査の経過

泉南市における開発は昨年度大幅に増加する結果となったが、今年度もその傾向は依然として続いていることがいえる。特にバブル経済崩壊以降、更地として放置されていた比較的規模の大きな土地が開発され宅地化しており、これに伴う確認・試掘調査が目立つ結果となっている。確認・試掘調査の結果によっては今後とも大規模な発掘調査が立て続けに発生する可能性が高い。

このような状況下、今年度本市において第2表のと通りの発掘調査が行われた。本書において報告する遺跡数は6遺跡、調査件数は15件である。毎年の傾向であるが、今年度も大半を小規模な調査が占めるが、比較的規模の大きな確認調査も含まれている。以下、それぞれの遺跡について調査の経過を述べる。

男里遺跡は市域北西端に位置する遺跡である。市域最大規模の遺跡で、先土器時代から近世まで幅広い時代が確認されている。市域で最も多くの調査が行われている遺跡であり、今年度においても最も多くの調査が行われた。今年度は遺跡中心から北西部の現男里集落内で2件、遺跡東部で3件の調査が行われた。また遺跡南東縁辺部の現馬場集落南部に位置する昨年度未報告分の1件もあわせて報告している。

岡中西遺跡は市域平野部の南西端に位置する。道路建設に伴い発見され、調査が行われたものである。中世の掘立柱建物や井戸が確認され、井戸からは呪符木簡が出土するなど、市域の中世社会を語るうえで欠かせない遺跡であることが判明した。しかしながらこの調査以降、小規模な調査がある程度の件数行われているものの遺跡の全容は不明である。今年度は遺跡のほぼ中心で1件と南西部の昨年度未報告分を報告している。

岡田遺跡は市域北東端部に位置し、古くは弥生時代に遡りうる資料も獲得されているが、遺跡の中心は中世以降に求められ、中世の集落域と生産域が良好な形で、現在まで継承されているものとして、注目される。今年度は遺跡北東部の現岡田集落部分で2件の調査が行われた。

北野遺跡は市域北東部に位置する。市域では比較的古くから周知され、平安時代後期の集落が良好に確認される遺跡として知られていたが、昨年度に実施された遺跡南西部における大規模な宅地開発に伴う発掘調査により、平安時代及び中世の遺構が同時に確認されたことで、遺跡の盛期が複数期あることが判明し、大きな成果があった。今年度は、昨年度未報告分2件とあわせ、この宅地内において行われた調査について報告している。

上村遺跡は市域北東部に位置する。平成2年度の大規模な分布調査によって周知された遺跡であるが、その後開発の及ぶことは少なく、今年度は平成11年度に遺跡南部で行われた開発に伴う調査以降、2件目の調査が行われた。

石ヶ原遺跡は市域北東部の丘陵部に位置する。上村遺跡と同じ分布調査によって周知されたが、立地の面からも当地域は開発の手が入る場所ではなかったが、先述のとおり市域の宅地化は当該地まで及ぶこととなり、本遺跡でもはじめての調査が行われた。

第1表 平成17年度発掘および試掘調査届出一覧表

平成17年12月31日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件数	面積 (㎡)	件数	面積 (㎡)	件数	面積 (㎡)
17年・1	2	251.96	0	0.00	2	251.96
2	1	349.40	3	2,271.84	4	2,621.24
3	2	1,564.48	2	2,193.82	4	3,758.30
4	2	242.89	0	0.00	2	242.89
5	3	6,759.14	7	40,131.62	10	46,890.76
6	2	3,472.96	6	8,391.58	8	11,864.54
7	2	279.86	6	13,255.10	8	13,534.96
8	5	26,268.48	3	4,003.12	8	30,271.60
9	5	942.40	4	52,478.55	9	53,420.95
10	5	1,673.61	5	11,002.98	10	12,676.59
11	5	4,992.67	2	1,495.54	7	6,488.21
12	2	307.65	0	0.00	2	307.65
合計	36	47,105.50	38	135,224.15	74	182,329.65

第2表 発掘調査一覧表

平成17年12月31日現在

No.	遺跡名	地区名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月	備考
1	男里遺跡	05-1区	男里	200.15	個人用倉庫	17年6月	本書掲載 ⑰-6
2	男里遺跡	05-2区	男里	241.59	個人住宅	17年4月	同上 ⑰-1
3	男里遺跡	05-3区	樽井	6248.69	店舗	17年6月	同上(確認調査) ⑰-5
4	男里遺跡	05-4区	樽井	101.57	個人住宅	17年11月	同上 ⑰-26
5	男里遺跡	05-5区	馬場	199.35	個人住宅	17年12月	同上 ⑰-29
6	男里遺跡	04-5区	馬場	349.40	個人住宅	17年3月	同上 ⑰-44
7	岡中西遺跡	05-1区	信達岡中	629.53	個人住宅	17年10月	同上 ⑰-15
8	岡中西遺跡	04-1区	信達岡中	685.58	店舗	17年3月	同上(確認調査) ⑰-39
9	岡田遺跡	05-1区	岡田	245.92	個人住宅	17年5月	同上 ⑰-4
10	岡田遺跡	05-2区	岡田	264.53	個人住宅	17年6月	同上 ⑰-3
11	北野遺跡	05-1区	信達大苗代	120.57	個人住宅	17年9月	同上 ⑰-19
12	北野遺跡	04-2区	信達大苗代	125.98	個人住宅	17年2月	同上 ⑰-43
13	北野遺跡	04-3区	信達大苗代	125.98	個人住宅	17年2月	同上 ⑰-42
14	上村遺跡	05-1区	新家	499.25	個人住宅	17年10月	同上 ⑰-22
15	石ヶ原遺跡	05-1区	新家	3272.81	宅地造成	17年10月	同上(確認調査) ⑰-7

第3表 試掘調査一覧表

平成17年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	範囲外	新家	3,988.26	宅地造成	17年1月12日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範囲外	樽井	414.53	長屋建住宅	17年1月26日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範囲外	新家	1,065.78	宅地造成	17年2月10日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範囲外	信達牧野	479.51	宅地造成	17年3月1日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範囲外	樽井	998.80	宅地造成	17年5月27日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範囲外	信達市場	387.42	分譲住宅	17年6月6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範囲外	信達岡中	996.73	店舗	17年6月24日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範囲外	新家	434.17	宅地造成	17年7月19日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範囲外	岡田	2,855.64	宅地造成	17年7月20日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範囲外	岡田	4,525.37	宅地造成	17年7月20日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範囲外	信達牧野	1,678.66	宅地造成	17年7月20日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範囲外	信達牧野	1,160.73	宅地造成	17年7月28日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範囲外	樽井	629.65	共同住宅	17年8月17日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範囲外	信達岡中	2,677.62	宅地造成	17年9月9日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範囲外	樽井	2,103.86	事務所	17年9月28日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範囲外	中小路	2,985.66	店舗	17年10月4日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範囲外	樽井	3,442.90	倉庫	17年10月27日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
18	範囲外	信達市場	6,436.60	宅地造成	17年11月1日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
19	範囲外	信達市場	1,368.86	宅地造成	17年11月21日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範囲外	樽井	2,317.51	宅地造成	17年11月24日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範囲外	信達市場	640.52	共同住宅	17年11月24日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成17年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月日	備考
1	座頭池遺跡	樽井	261.47	個人住宅	17年2月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	中小路遺跡 北野遺跡	信達大苗代	162.00	ガス	17年3月15日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	坊主池遺跡	信達市場	230.92	個人住宅	17年9月21日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	男里遺跡	馬場	17.50	ガス	17年11月21日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	幡代遺跡	幡代	28.19	電信電話	17年11月28日	遺構・遺物は確認されなかった。

第2章 男里遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1、2）

男里遺跡は市域の北西端に位置し、地形的には男里川右岸の沖積地に立地する。遺跡の西端、男里川沿いに発達した自然堤防上には現男里集落があり、遺跡東端の沖積段丘上には現馬場集落が立地する。その間の氾濫原や谷底低地、旧河道は主に耕作地として利用される。

遺跡中央に位置する双子池は男里川旧河道の痕跡とされ、南北2つの溜池の間を「信長街道」^①が横断する。北に位置する双子下池は13世紀以降に築造され、上池については17世紀代の築造を経て、20世紀前半の拡大によって現在みられる姿になったものと考えられている^③。

男里遺跡はすでに昭和初期には考古学的に注目^④されていたもので、昭和50年代からは行政機関による発掘調査が継続的に実施され、多くの成果を挙げている。以下に今日までの概要を述べる。

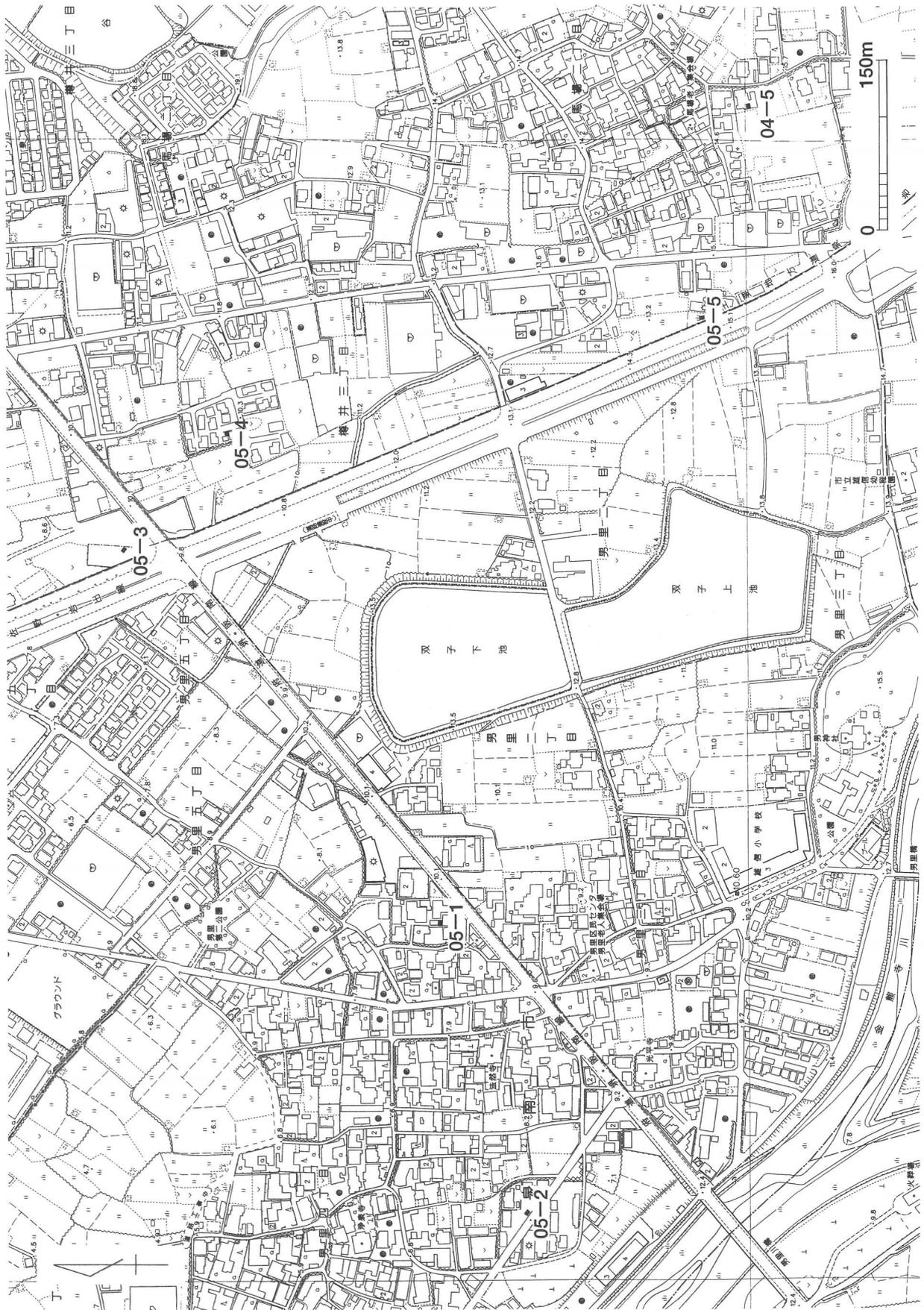
旧石器時代のナイフ形石器^⑤が双子下池より採集され、遺跡南東部より縄文時代中期末から後期初頭の遺物が出土^⑥するものの、いずれも遺構に伴うものではなく、詳細は明らかでない。縄文時代晩期には双子池北方において長原式併行期のピット^⑦、遺跡北西縁から北縁部において滋賀里Ⅲ・Ⅳ式期の溝や谷^⑧、遺跡北西部や双子上池において流路が確認されている^⑩。滋賀里期の遺物にはサヌカイト原礫やチップ、石棒なども含まれることから、近隣に集落が存在する可能性が高い。また双子上池堤体部の調査では、長原式併行期の深鉢が弥生時代前期の壺とほぼ同一の層位に属する包含層より出土し、泉州地域では稀有な共伴関係を示すものとして注目される。

弥生時代中期前葉には、遺跡北西縁部の先にみた谷の埋土上層に遺物が含まれ、谷の南東側に集落が求められる。弥生時代中期中葉から後葉には双子上池の南東に集落が営まれる。30数棟の竪穴住居や多数のピット、掘立柱建物よりなる居住域、方形周溝墓、木棺墓よりなる墓域が確認された^⑫。集落を画する大溝や地形的な条件から南北200m、東西100mの範囲に展開するものと考えられている。大溝を中心として多くの遺物が出土したが、Ⅳ様式のもの为主体を占めており、時期的に限定された集落といえる。複数の掘立柱建物を描いた絵画土器が出土している。

弥生時代後期から古墳時代にかけて明確なまとまりを持つものは少ない。庄内式併行期から布留式期には双子池内部を南北に縦断する流路及び流路東岸に展開する集落が確認されている。集落は方形竪穴住居^⑬や掘立柱建物^⑭よりなるが、その拡がりについては明瞭でない。続く古墳時代中期においても、現在のところ遺構や遺物は知られない。古墳時代後期には遺跡北西端部において複数の竪穴住居^⑮が確認されており、居住地を大きく移動させたことが窺える。

飛鳥時代から奈良時代には双子池の東西両岸にあたる地点より竪穴住居、掘立柱建物、廃棄土坑^⑯などが確認され、遺跡北西端部においても掘立柱建物^⑰が確認される。また双子池北端部ではしがらみを備えた流路が確認されており、現在のところ遺跡内の灌漑遺構としては最古となる。当該期においては製塩土器の出土が顕著である。

平安時代では双子池西側に掘立柱建物^⑱、双子池北東にも掘立柱建物^⑲や廃棄土坑^⑲などが確認される。いずれも10世紀後半代のものである。これらに少し遅れて北西部において掘立柱建物よりなる集落^⑳が出現する。同時代に関連するものとして、延長5（927）年成立の『延喜式』に和泉国



第1図 男里遺跡調査区位置図

駅として日部及び噺喉の駅に馬七疋が備えられたことが記され、同神名帳には日根郡男神社が登記されている。現在も遺跡の南西端に鎮座する男神社である。一方噺喉駅の実態は明らかではなく、当時の南海道のルートも確定していない。とはいえ男里遺跡は古代南海道の推定ルート²³に面しており、上述したように考古学的にも前代より連綿と遺構、遺物が確認されることから、噺喉郷の中心地であった可能性が高く、噺喉駅を周辺に求めても大過ないものと思われる。

平安時代末から鎌倉時代には、前代の集落域に加えて、遺跡南東部、現馬場集落の南端においても集落が現れる²⁴。周辺では瓦類の出土が顕著で、小字より「安狼寺」の存在が想定される。同様に現男里集落の南西部においても当該期の瓦類が出土し²⁵、現在の光平寺に連なるものと考えられる。この様にほぼ同時期の集落が共存するという状況は以降も継承され、中世遺物包含層が現男里集落内及び馬場集落北方に多く確認されることから、現在の集落域が中世を経て形成されたことを示唆するものである。

中世以降の遺構としては耕作痕が主体を占める。その分布は現在の耕作域と重なることから、やはり中世からの土地利用を継承していることがわかる。

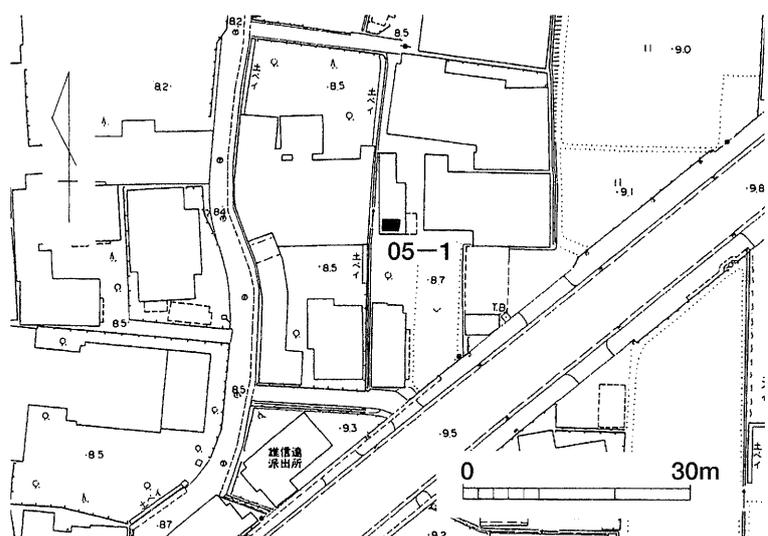
第2節 05-1区の調査

1. 位置 (第1、2図)

調査区は遺跡の中央部北寄りに位置する。府道堺阪南線「男里」交差点より北東へ約100mの地点であり、現男里集落の東縁部にあたる。周辺では北西約40mに93-7区²⁷、北東約30mに04-1区、西約40mには04-2区が位置している²⁸。

地形的には氾濫原または谷底低地に属するものと考えられるが、先の調査成果からは、周辺には比較的安定した地山面が拡がっているものと考えられる。

現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。



第2図 男里遺跡05-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 3、5)

盛土(1層、約40cm)以下、遺構や攪乱のみられないトレンチ中央部から西端にかけては、暗橙色混じり暗灰黒色砂質土(2層、約30~40cm)、暗灰褐色混じり黄褐色粘土(3層、約10cm)、暗褐色シルト(4層、約10cm)淡灰褐色土(5層、約5cm)と続き、地山であるにぶい黄褐色粘土へと至る。このうち2層は耕作土であり、2~4層についてはほぼ水平堆積を呈する。

トレンチ北東隅及び東端部においては2層を切り込むかたちで暗黄褐色混じり灰黒色土（6層、約10～50cm）と暗青灰色砂質シルト（7層、約40cm）よりなる攪乱が存在し、以下の層位を大きく乱している。

地山上面において遺構が確認された。

3. 遺構（P.L. 3、5）

トレンチ北東隅及び東端部において落ち込み状の遺構が確認された。確認されたのは西辺の一部に過ぎず、その大半がトレンチ外へと伸びるため、全容は明らかでない。また地山面において確認されたため、本来の形状とは異なっている。現状ではトレンチ北端より発し、北西から南東方向に蛇行しつつ伸びる肩が、トレンチ東端に達する直前で南へと屈曲するものである。肩部長1.5m、確認面よりの深さ50cmを測る。断面形状は口の開いた皿状を呈するが、全容が不明であり、かつこうした検出状況により底部の確認が行えなかったため、確定的ではない。

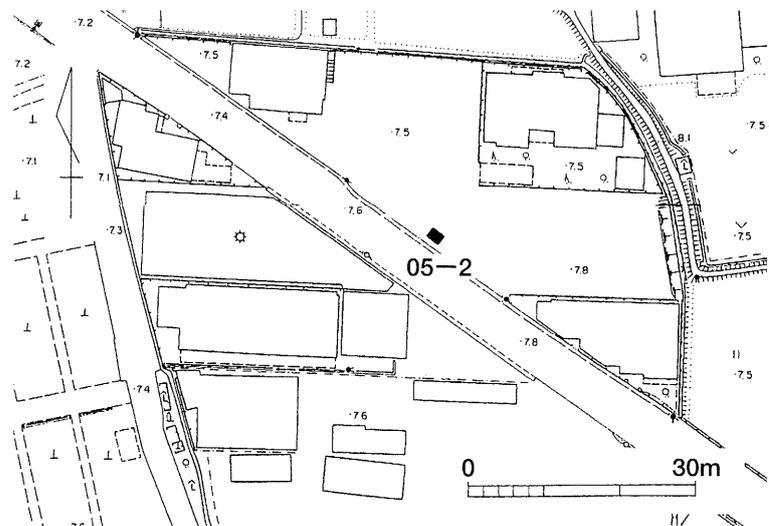
埋土は6層確認された。攪乱を免れた範囲においては、2層直下に灰色砂（8層、約10cm）、黄白色粘土（9層、約15cm）、暗灰色粘土（10層、約15cm）がレンズ状に堆積する。トレンチ東端部においては10層直下に淡黄白色土（11層、約20cm）と明青灰色粘土（12層、約20cm）がみられ、いずれも北方向に緩やかに傾斜していることからすると、本来は同様の堆積状況であると考えられる。最も下位で確認された暗青灰色粘土には植物遺体が含まれていることから、遺構が帯水状態にあったことがわかる。埋土からは遺物がまったく出土しなかった。

以上、極めて部分的な調査しか行っていないため、不確定な要素が多いが、確認された状況から遺構は灌漑に用いた井戸、いわゆる野井戸である可能性が高いものと推測される。しかしながら遺物が出土しなかったため時期的には不明であるが、層位的にはそれほど遡りうるものではない。

第3節 05-2区の調査

1. 位置（第1、3図）

調査区は遺跡の北西部に位置する。府道堺阪南線「男里川」交差点より北西へ約130m進んだ地点であり、現男里集落の西端にあたり、調査区から西へ100mには男里川が流れる。地形的には氾濫原または谷底低地に属する。現集落西端部においては調査機会が少ないが、周辺では比較的多くの調査が行われており、東約15mに96-19区²⁹、北約20mに98-8区³⁰、南東約50mに00-7区³¹がそれぞれ位置



第3図 男里遺跡05-2区地形図

している。これらの調査では明確な遺構こそ確認されていないが、氾濫原に属する砂礫層と耕地化に伴う整地業などが確認されている。98-8区においては砂礫層より弥生時代と目される遺物がわずかに出土しており、注目される。

現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 3、5)

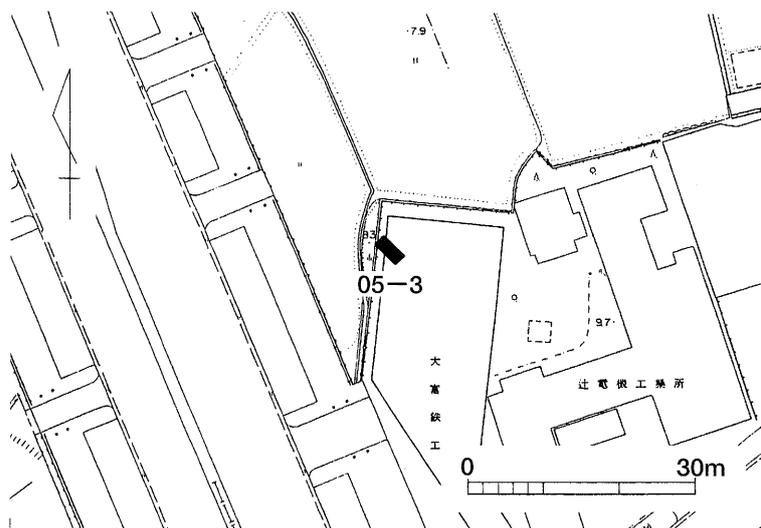
盛土(1層、約90cm)は途中にコンクリート土間を介在し、上下に2分される。以下に暗灰褐色砂質シルト(2層、約20cm)、暗橙色混じり暗灰褐色砂質土(3層、約20cm)、淡灰白色砂質土(4層、約10cm)、明橙色粘土(5層、約5cm)、淡暗灰褐色砂質シルト(6層、約50cm)と続き、淡暗灰褐色礫混土(7層)へと至る。2層及び3層の上面において起伏が激しいものの、これらの各層は概ね水平堆積を呈する。2、4層が耕作土、3、5層はそれぞれの床土にあたる。6層については旧耕作土とも考えられるが、砂礫の直上にあることから、耕地化に伴う整地土と捉えることのできるものである。また7層は円礫を多く含み、河川性堆積によるものと判断される。

これらのうち6層上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。またいずれの層位からも遺物は出土しなかった。

第4節 05-3区の調査

1. 位置(第1、4図)

調査区は遺跡の北部、地形分類では沖積段丘面にあたる。本調査区周辺では、西側に隣接する府道新設の調査で14、15世紀代の耕作痕^⑫、東側50mの97-5区では包含層^⑬、北側100mの93-4区では時期不明の土坑^⑭が確認されている。トレンチは1カ所設定した。



第4図 男里遺跡05-3区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 3、6)

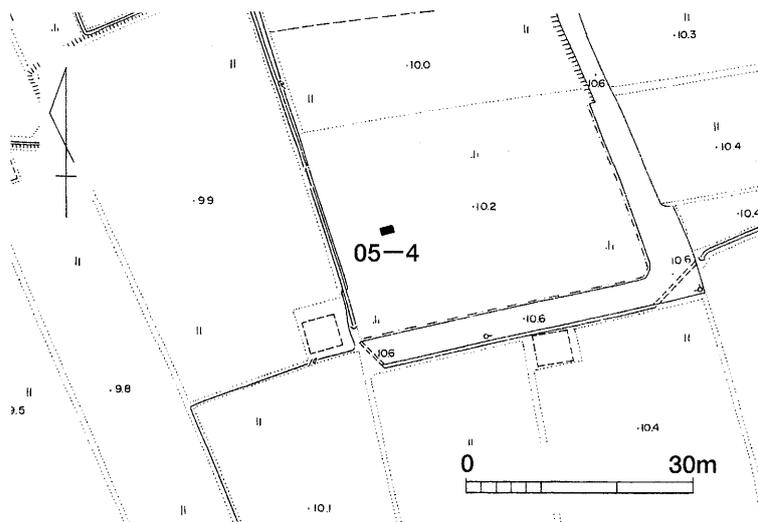
盛土(1層、約140cm)を除去すると、灰褐色シルト(2層、約10cm)、黄褐色シルト(3層、約40cm)、黒褐色シルトブロック混じり灰色礫(4層、約10cm)と続き、灰色礫混じり灰白色粗砂(5層)にいたる。3・4・5層上面で精査を行ったが遺構は確認されず、いずれの層位からも遺物は出土しなかった。1層は開発に伴う盛土、2・3層はそれ以前の耕作土、4層以下は耕地化以前の河川による堆積と考えられる。

第5節 05-4区の調査

1. 位置（第1、5図）

調査区は遺跡の北東端に位置し、府道金熊寺男里線「双子池北」交差点より南東へ約100mの地点である。地形的には男里川右岸の沖積段丘面に相当する。

調査区を含む一画では95、96年度に集中して調査が行われており、いずれの地点においても安定した地山面と地山直上に厚く堆積する黒褐色土層が確認されている。また調査区に北接する99-6区^⑤においては遺構埋土と思しき暗褐色粘土層が確認され、中世の遺物が多く出土している。



第5図 男里遺跡05-4区地形図

調査区の現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 3、6）

盛土（1層、約40cm）を除去すると、耕作土である暗黒色土（2層、約15cm）及び、床土である橙色混じり淡灰褐色土（3層、約15cm）、旧耕作土である淡灰褐色砂質土（4層、約15cm）がいずれも水平堆積をみせる。続いて淡暗褐色礫混シルト（5層、約10～15cm）、暗褐色シルト（6層、約30～40cm）がみられる。6層は本調査区での状況は若干軟弱ではあるが、周辺で確認されている黒褐色粘土層に対応するものである。6層と地山層の間には淡黄灰色土（7層・約5cm）が介在するものの調査区北端では一部存在しない箇所もあり、一様ではない。6層の影響により地山層が変質したものと考えられる。地山は黄褐色粘土である。上面は若干の凹凸を持ち、そこには6層ないしは7層が染み込み状に堆積している。地山上面の標高は9.2mを測る。

5層及び地山面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。またいずれの層位からも遺物は出土しなかった。

第6節 05-5区の調査

1. 位置（第1、6図）

調査区は遺跡の南東部に位置し、現馬場集落より西にはずれた耕作地にあって府道金熊寺男里線に西面する。地形的には氾濫原または谷底低地にあたる。周辺では先の府道敷の調査のほか、南東約50mに99-4区が位置する。99-4区では平安時代末から鎌倉時代の多くの瓦が出土して

おり、府道敷の調査においても同様の成果が得られていることから、周辺に中世寺院「安養寺」が存在したものと考えられている。

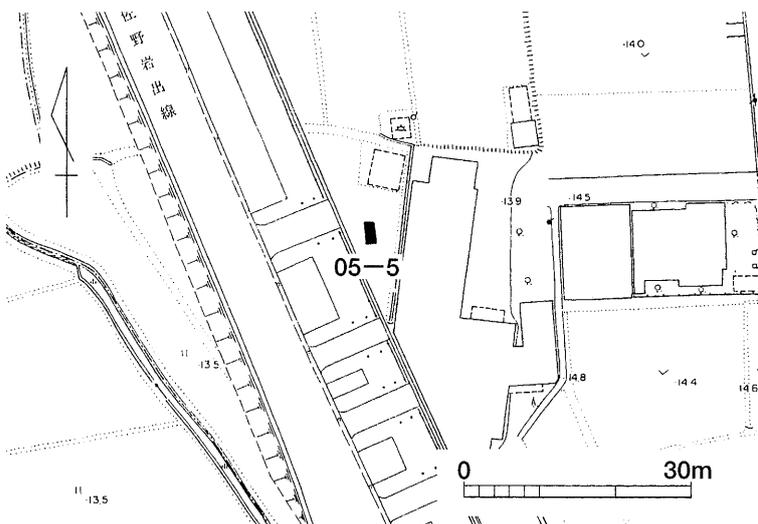
現況は更地であるが、府道に面して造成されており、かなりの盛土が施されている。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 3、6)

盛土(約1.7m)を除去すると、部分的に耕作土である暗灰黒色土

が残存するが、トレンチ西半においては認められない。続いて床土もしくは旧耕作土と考えられる淡褐色混じり灰褐色砂質土(2層、約10cm)がほぼ全域に広がる。さらに淡暗黄褐色礫混シルト(3層、約10~40cm)が基本的には全面にみられるが、下層である暗黄褐色礫混土(4層)が露呈する箇所もある。4層は河川性堆積を呈する砂礫層で、礫を多量に含み硬く締まり安定しているが、その上面にはかなりの凹凸を伴う。標高は12.9~13.3mを測る。氾濫原に属する地山であるとも考えられるが、確証は得られなかった。以上のうち、3、4層上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。またいずれの層位からも遺物は出土しなかった。



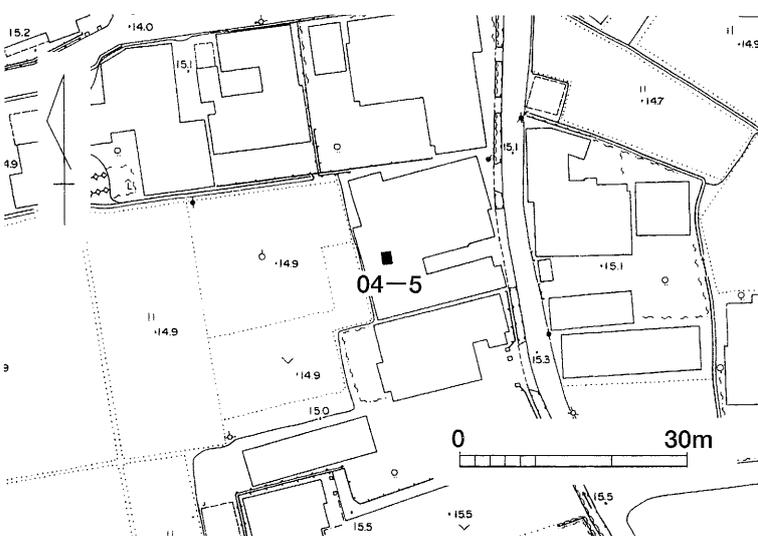
第6図 男里遺跡05-5区地形図

第7節 04-5区の調査

1. 位置(第1、7図)

調査区は、遺跡の南東部に位置し、現馬場集落の南西端にあたる。地形的には沖積段丘に属する。周辺では、調査区の西に隣接して90-10区^⑨があり、遺構検出のみの確認調査ではあったが、12世紀代の遺構、遺物が多く確認され、当該期の集落の存在が考えられている。

調査区は既存建物が撤去され、更地であった。トレンチは1カ所設定した。



第7図 男里遺跡04-5区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 3、7)

既存建物に伴う盛土(1層、約20~60cm)、を除去すると、淡褐色礫混土(2a層、約20~40cm)が淡褐色礫(2b層、約10~20cm)を間に介在し、上下に堆積する。河川性の自然堆積である。2a、b層の上面において精査を行ったが、遺構は確認されず、また遺物も全く出土しなかった。

河川性堆積による礫層が確認されたことにより、調査区は段丘上の浅い谷地形に含まれることが明らかである。さらに90-10区とは全く異なる状況であると考えられ、90-10区において確認された中世集落については、調査区までは拡がらないものと判断される。

- 註 ① 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道-調査報告編-』(1987)
② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・II』(1997)
③ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VII』(2003)
④ 藤岡謙二郎「泉南郡雄信達村彌生式遺跡」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第12輯』大阪府(1942)
⑤ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VI』(2002)
⑥ 財大阪府文化財センター『男里遺跡』(2005)
⑦ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)
⑧ 泉南市教育委員会「男里遺跡・II」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
⑨ 泉南市教育委員会「E区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)
⑩ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)
泉南市教育委員会「男里遺跡99-9区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVIII』(2001)
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VIII』(2004)
⑪ ⑤と同じ
⑫ ⑥と同じ
⑬ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・VIII』(2004)
⑭ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・V』(2000)
⑮ 泉南市教育委員会「B・D・E区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)
⑯ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1978)
泉南市教育委員会「男里遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)
⑰ 泉南市教育委員会「D区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』(2002)
⑱ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・II』(1997)
⑲ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』(1978)
⑳ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)
㉑ 財大阪府埋蔵文化財協会「1993年度の調査成果」『男里遺跡』(1994)
㉒ ⑰と同じ
㉓ 足利健亮「歴史地理学からみた和泉の古道」『熊野・紀州街道-論考編-』大阪府教育委員会(1987)
㉔ 平成2年度、泉南市教育委員会による90-10区の調査。『泉南市遺跡群発掘調査報告書VIII』(1991)にトレンチ位置掲載。
財大阪府文化財センター『男里遺跡』(2005)
㉕ 泉南市教育委員会「男里遺跡99-4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』(2000)
財大阪府文化財センター『男里遺跡』(2005)
㉖ 堀田啓一「考古編」『泉南市史 史料編』泉南市(1982)
泉南市教育委員会「光平寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)
㉗ 泉南市教育委員会「男里遺跡93-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)
㉘ 泉南市教育委員会「男里遺跡04-1・2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXII』(2005)
㉙ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-19区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)
㉚ 泉南市教育委員会「男里遺跡98-8区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』(2000)
㉛ 泉南市教育委員会「男里遺跡00-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVIII』(2001)
㉜ 財大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』(1994)
㉝ 泉南市教育委員会「男里遺跡97-5区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)
㉞ 泉南市教育委員会「男里遺跡93-4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)
㉟ 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』(1997)
㊱ 泉南市教育委員会「男里遺跡99-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』(2000)
㊲ ⑥と同じ
㊳ 泉南市教育委員会「男里遺跡99-4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』(2000)
㊴ 平成2年度、泉南市教育委員会による90-10区の調査。『泉南市遺跡群発掘調査報告書VIII』(1991)にトレンチ位置掲載。

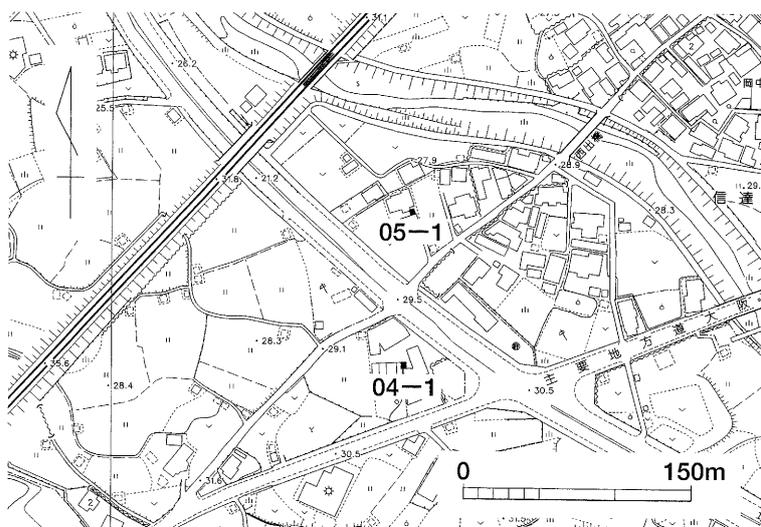
第3章 岡中西遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L. 1、2）

岡中西遺跡は市域平野部の南西端にあり、現信達岡中集落の東端から中央部に岡中遺跡が、金熊寺川を挟んで集落西端が岡中西遺跡となる。金熊寺川が遺跡の東限となり、基盤山地より連続する丘陵及び高位段丘によって南限を画す。地形的には、金熊寺川に沿って発達する市域では最も広大な沖積段丘面の南西端にあたる。

遺跡は1988年の府道建設工事の際に発見され、周知されたもので、その時の確認調査では掘立柱建物、

井戸などからなる中世集落が確認され、井戸からは呪符木簡が出土するなどしている。しかしその後は、遺跡北東部を中心にわずかに数件の調査が行われたのみであり、明瞭な遺構、遺物の発見には至っていない。しかしながら当遺跡は、市域を代表する中世遺跡である岡中遺跡との密接な関連を前提として歴史的な評価が下されるべきであることから、今後は両遺跡において蓄積されたデータを意識的に組み立てる作業が必要である。

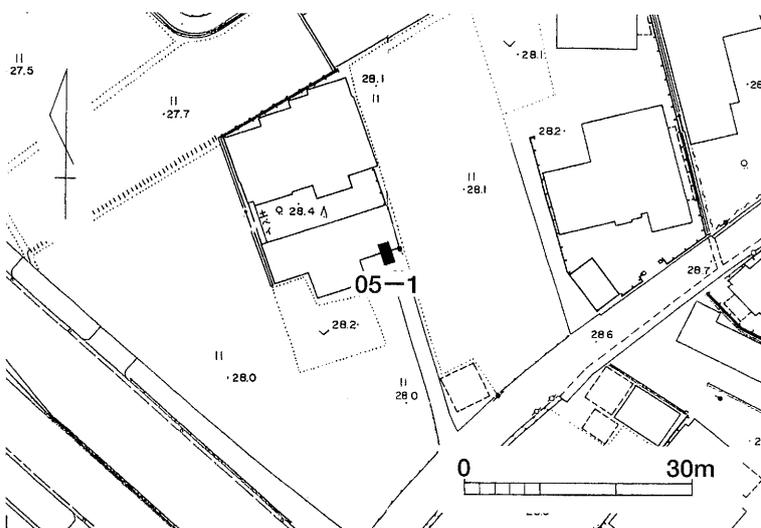


第8図 岡中西遺跡調査区位置図

第2節 05-1区の調査

1. 位置（第8、9図）

調査区は遺跡の北東部に位置し、現信達岡中集落の西端にあたる。地形分類では金熊寺川左岸の沖積段丘上に立地するものと考えられる。調査区の西約50mには遺跡発見の契機ともなった府道金熊寺男里線が走っており、周辺では府道敷の調査のほか、北西約25mに95-1区、南東約80mに96-1区、南約80mには04-1区が位置している。これらの調査においては



第9図 岡中西遺跡05-1区地形図

ずれも砂礫による地山が確認されるが、府道敷きの調査を除くと顕著な遺構は確認されていない。
現況は更地であり、トレンチは1ヶ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 3、7)

調査区全体に見られる盛土(1層、約50cm)を除去すると、滋味土である淡灰褐色土(2層、約20cm)、床土である暗橙色土(3層、約5cm)及び淡暗褐色土(4層、約5cm)がそれぞれ水平堆積をみせる。トレンチ北半ではさらに灰褐色混じり淡褐色砂(5層、約10cm)、明灰色粘土(6層、約5cm)、黄白色細砂(7層、約10~20cm)、淡褐色砂(8層、約10cm)がみられ、明灰白色砂(9層)へと至る。トレンチ中央から南半では4層直下に暗褐色礫混じり砂が厚約40cmほどで堆積し、以下に9層が広がる。5~8層までが同層と切り合うものである。また9層を一部深堀したところ、約10cm程で暗褐色礫混じり砂と互層をなしていることが観察された。9層上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。

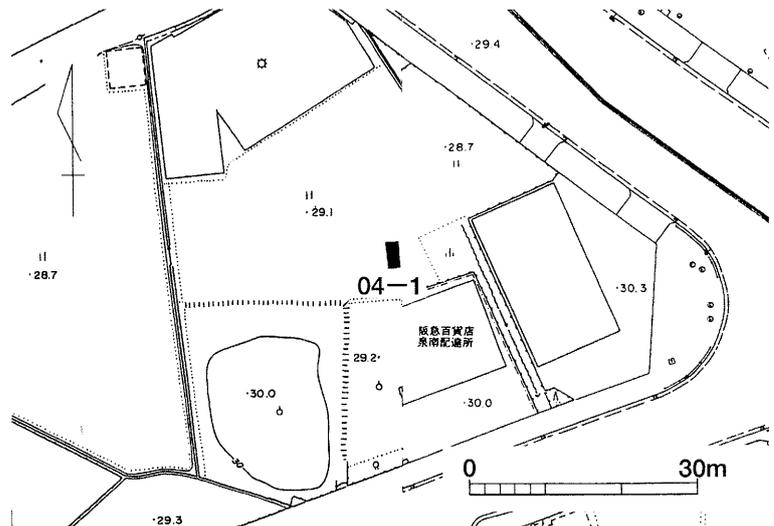
こうした状況から5層以下については、いずれも河川性堆積によるものと捉えることができ、調査区が金熊寺川の氾濫原に立地していることが明らかとなった。しかしながらいずれの層位からも遺物が出土しなかったため、その形成時期は不明である。

第3節 04-1区の調査

1. 位置(第8、10図)

調査区は遺跡の南西にあり、府道金熊寺男里線「泉南インターチェンジ北」交差点の北西に位置する。地形的には金熊寺川左岸の沖積段丘に分類される。調査区東に隣接する府道敷において、調査が行われているほか、北東約50mには96-1区^⑤、西約140mに90-1区^⑥がそれぞれ位置する。

現況は更地であり、トレンチは1カ所設定した。



第10図 岡中西遺跡04-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(P L. 3、7)

厚さ2mに及ぶ粗い盛土を除去すると、灰黒色土(2層、約10cm)、橙色粘土(3層、約20cm)、暗灰褐色礫(4層、約10cm)、淡暗褐色シルト(5層、約25cm)、淡橙色シルト(6層、約10cm)、淡暗褐色砂質シルト(7層、約20cm)の各層がいずれも水平堆積をみせ、暗灰褐色礫の地山へと至る。2層は現代耕作土、3層は床土、4層は整地層と捉えることができ、さらに5

層は旧耕作土、6層は床土、7層は整地もしくは耕作に伴う客土であると考えられる。

地山は直径20～30cm大の円礫よりなり、隣接する府道敷における遺構面に対応するものと考えられる。遺構は確認されなかったが、4～6層に中世に属する土師器極細片がわずかに含まれることから、府道敷において確認されている中世集落がさらに西に拡がっていた可能性が考えられる。

- 註 ① 泉南市教育委員会「岡中西遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
② (財)大阪府埋蔵文化財協会「岡中西遺跡」（1988）
③ 泉南市教育委員会「岡中西遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）
④ 泉南市教育委員会「岡中西遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）
⑤ ④と同じ
⑥ 泉南市教育委員会「岡中西遺跡90-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅷ』（1991）

第4章 岡田遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L. 1、2）

岡田遺跡は市域北東部に位置し、現岡田集落の南西端部及びその南側に広がる耕作地を中心とする。地形的には大半を低位段丘が占めるが、遺跡北縁にのみ氾濫原や砂丘がみられる。

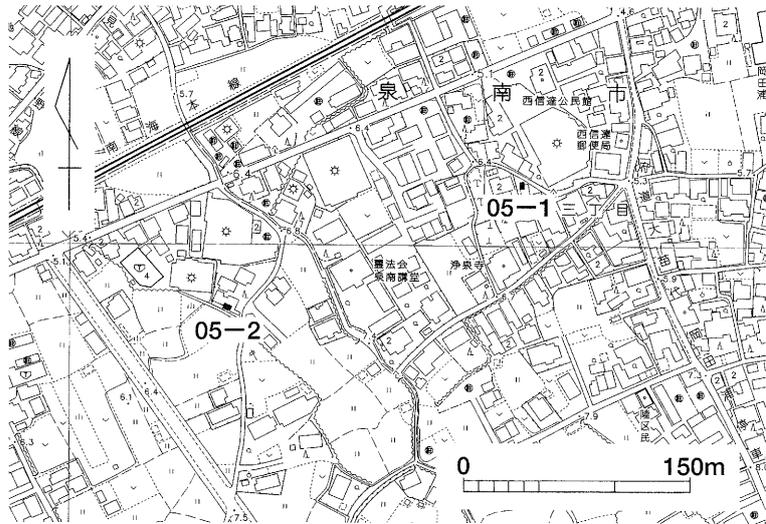
現集落の南西部やさらに南側の耕作地を対象として、個人住宅建設や宅地開発、市道敷設などに伴い多くの調査が実施されている。遺跡東部に位置する90-3区^①において凹基式石鏃、91-2区^②において古代の須恵器などが確認されているが、いずれも2次移動を受けており詳細は不明である。

現在のところ明確な遺構、遺物が確認されるのは中世以降である。遺跡北東部に位置する97-1・2区^③において掘立柱建物を構成すると目されるピットや土坑、溝などが確認されている。集落に関連する遺構が確認されるのは上記調査区周辺に限定され、転じて現在の耕作地における調査では耕作地境界をなす落ち込み^④、灌漑用井戸^⑤などが確認されている。こうしたことから当遺跡周辺においては中世以降の土地利用に大きな変化がなかったものと考えられ、こうした傾向は隣接する岡田西遺跡の調査成果^⑥とも符合する。

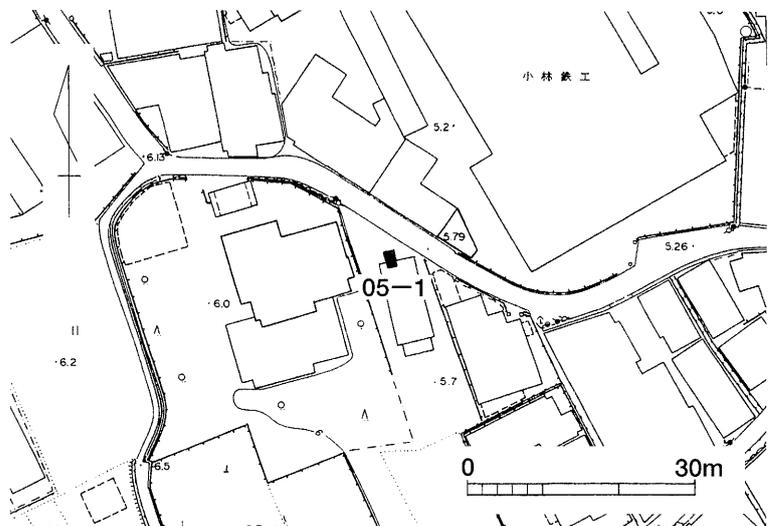
第2節 05-1区の調査

1. 位置（第11、12図）

調査区は遺跡の北東部に位置する。南海本線「岡田浦」駅の南170m、府道大苗代岡田浦停車場線の西80mにあり、現岡田集落の南西部にあたる。地形的には低位段丘に属する。調査区以西において比較的多くの調査が実施されており、北西約70mには中世の遺構、遺物が確認された97-1、2区^⑦が



第11図 岡田遺跡調査区位置図



第12図 岡田遺跡05-1区地形図

位置する。

現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 3、8)

盛土 (1層、約10~30cm) 以下、淡灰黒色シルト (2層、約15cm)、暗灰白色砂質土 (3層、約10~20cm)、暗灰黒色土 (4層、約10cm)、黒灰色砂 (5層、約45cm) が確認される。2、3層は耕作土及び床土であり、耕作に関連してかトレンチ東半において起伏が激しい。5層には炭や近世~近代の遺物がみられることから当該期の整地土と考えることができる。

5層以下の状況は、トレンチ北東隅に灰白色砂 (6層、約10cm) がみられるものの、大半は淡暗褐色シルト (7層、約30cm) を経て、地山である暗黄褐色礫混粘土へと至る。地山面の標高は5.8~5.9mを測り、北から南へ緩やかに傾斜している。地山面において遺構が確認された。

3. 遺構 (P L. 3、8)

遺構は土坑 (S K 01) が1基である。トレンチ中央、西壁に接して確認され、西半はトレンチ外へと伸びるため全容は明らかではない。現状では長軸を南東-北西方向に向けた隅丸長方形を呈する。断面形状は浅い皿形を呈し、確認面よりの深さ10cmを測る。埋土は7層であり、中から瓦器碗や真蛸壺などが出土した。

4. 遺物 (P L. 11、第13図)

OKD1は瓦器碗である。口縁端部のみであるが、内外面ともにミガキを施し、内面端部に平行する2条の暗文が認められる。OKD2は土師質真蛸壺である。体部のみであり、詳細を欠くが、内外面ともにユビオサエによって仕上げられており、外面には縦位に2条、横位に1条の刻線よりなるヘラ記号が認められる。



第13図 岡田遺跡05-1区出土遺物

第3節 05-2区の調査

1. 位置 (第11、14図)

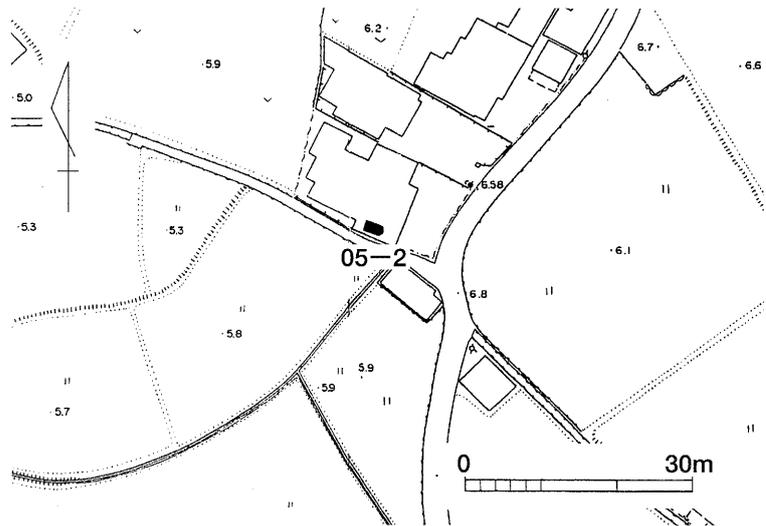
調査区は遺跡の北部に位置する。市道中小路岡田線と岡田駅上線の交差点より南東へ約140m、現岡田集落の西端にあたる。現在は宅地化されているが近年までは耕作地として利用されていた地点である。地形的には低位段丘に属する。周辺では比較的多くの調査が行われているが、多くが近世以降の粘土採掘にかかる削平を受けていることが明らかとなっている^⑧。

現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 4、8)

盛土 (1層、約50cm) 以下、基本的には淡暗灰色砂質土 (2層、約15cm)、明橙色粘土 (3層、

約5cm)、暗橙色混じり淡灰褐色砂質土(4層、約10cm)、淡灰褐色混じり淡褐色砂質土(6層、約30cm)、暗褐色混じり灰褐色砂質土(7層、約15cm)の各層が概ね水平堆積を呈し、地山である明黄褐色粘土へと至る。3層はトレンチ西半にのみ存在し、またトレンチ西端部において4、6層を切り込む淡灰褐色砂質土(5層、約40cm)がみられる。2層及び6層が耕作土、3、4層は2層に伴う床土であり、5層及び7層についても耕作土と考えることができる。7層にわずかに瓦器細片が含まれる。



第14図 岡田遺跡05-2区地形図

地山上面の状況は平坦であり、標高は6.8mを測る。地山面において遺構が確認された。

3. 遺構 (PL. 4、8)

遺構は溝 (SD01) である。トレンチ北隅において確認された。東西両端がトレンチ外へ延びるため全容は明らかでないが、現状ではほぼ東西方向に主軸を向ける直線溝を呈し、東端のみわずかに北へ湾曲する。長さ1.0m以上、最大幅50cm、確認面よりの深さ10cmを測る。南側にはわずかな平坦面が認められる。埋土は1層であり地山ブロックを含む淡灰褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

以上、部分的な確認であるため、機能や時期については判然としないものの、灌漑用の用途としては規模が小さく、また時的には、7層を中世包含層と捉えるならば、中世以前に遡る可能性が考えられる。

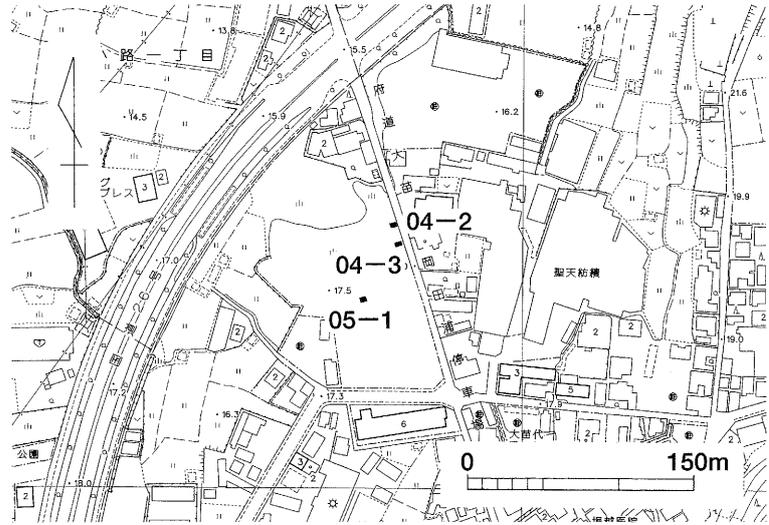
- 註 ① 泉南市教育委員会「岡田遺跡90-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)
 ② 泉南市教育委員会「岡田遺跡91-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』(1992)
 ③ 泉南市教育委員会「岡田遺跡97-1、2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)
 ④ 泉南市教育委員会「岡田遺跡94-2、3、4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)
 ⑤ 泉南市教育委員会「岡田遺跡94-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』(1995)
 ⑥ 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡遺跡発掘調査報告書』(1995)
 ⑦ ③と同じ
 ⑧ 泉南市教育委員会「岡田遺跡98-3区、99-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』(2000)
 泉南市教育委員会「岡田遺跡00-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』(2001)

第5章 北野遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1、2）

北野遺跡は市域の北西部に位置する。地形的には市域平野部を構成する低位段丘の南東縁部に立地する。

遺跡の西端から北東を国道26号が通り、西半には府道大苗代岡田浦停車場線が通る。府道の東側にあたる遺跡の中心部は工場や店舗として開発が進み、北部や南西部は耕作地として利用されてきたが、南西部については昨年度大規模な宅地開発が行われている。



第15図 北野遺跡調査区位置図

市内では比較的早くより発掘調査が行われてきたものであるが、その大半は府道東側に集中し、遺跡南西部については先の宅地開発に伴う事前調査が最初のものである。また近年は遺跡東端を限る「稻荷山」南西裾部、すなわち熊野街道に面する地点においての調査も実施されているが、明確な遺構、遺物の発見には至っていない。遺跡中央部に位置する55-7区^②、91-1区^③、99-3区^④において平安時代後期に属する掘立柱建物や井戸などが確認され、集落中心部との評価がなされてきたが、南西部における04-1区^⑤の調査において当該期の大規模な溝が確認されたことにより、平安時代の集落が予想以上に広範囲に広がる可能性が出てきている。同時に中世の灌漑用井戸が確認され、南に隣接する大苗代遺跡^⑥との関連が視える結果が得られた。また遺跡北端にあたる新伝寺遺跡・北野遺跡04-1区^⑦において奈良時代後半の掘立柱建物や土坑が確認されたことにより、当遺跡が大きく3期の盛行を迎えたことが明らかとなりつつある。

第2節 05-1区の調査

1. 位置（第15、16図）

調査区は遺跡の南西部に位置する。国道26号線「大苗代西」交差点の南西にあって、昨年度大規模な宅地開発が行われた一画に含まれる。地形的には低位段丘に属する。

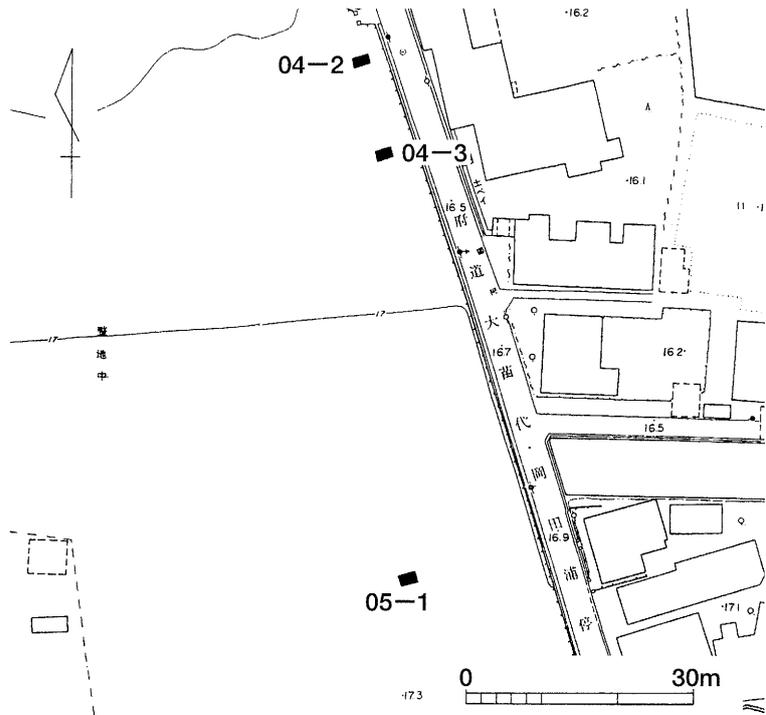
調査区の北約60mには04-2、3区が位置し、北東約20mには04-1区のうち、中世の灌漑用井戸が確認されたトレンチがある。また南約80mには共同住宅建設に先立って行われた大苗代遺跡91-1区^⑧が位置し、平安時代末から鎌倉時代の溝や土坑、柱穴などが確認されている。

調査区の現状は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

(P L. 4、9)

盛土(1層、約80~100cm)を除去すると耕作土である淡灰褐色砂質土(2層、約10cm)及び床土である淡黄灰褐色砂質土(3層、約20cm)がトレンチの西半にのみ残存している。トレンチ東端部では盛土直下に地山である淡橙褐色礫混粘土が露呈する。またトレンチ北西部においては地山直上に約30cmの厚さで淡灰褐色礫混土(4層、約25cm)がみられ、地山と共に遺構面を形成している。地山面の状況は概ね平坦であるが、南東から北西方向に傾斜しており、標高は15.9~16.1mを測る。



第16図 北野遺跡05-1区・04-2区・04-3区地形図

3. 遺構 (P L. 4、9)

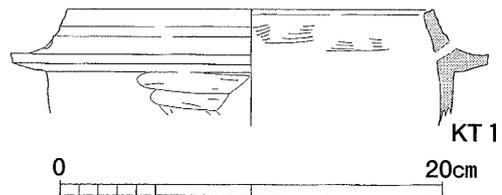
トレンチの南西部において確認された素掘りの井戸 (S E 01) である。南西端がトレンチ外へと延びるため、全容は不明であるが、現状では南北60cm、東西1.0mを測るいびつな円形を呈するものと考えられる。断面形状は逆台形を呈し、基底は平坦である。深さ80cmを測る。

埋土は7層に分かれ、概ねレンズ状の堆積をみせることから、ある程度の時間幅を持って暫時的に埋没したことが窺える。多くは灰褐色系の粘土であるが、基底には灰白色粘土が堆積する。上層から瓦質土器が出土した。

以上、S E 01については灌漑用の井戸であると考えられ、隣接する04-1区においても同様の遺構が確認されている。

4. 遺物 (P L. 11、第17図)

K T 1 は瓦質土器羽釜である。胴部から底部を欠くが、鏝部や口縁部はほぼ完存する。鏝部から内傾しつつ立ち上がる口縁部に、内傾する端部を持つ。口縁部外面には段を有するが、浅く凹線状を呈する。胴部は横位のケズリ、内面はハケが施される。胴部のヘラケズリは鏝部境界に及び、その範囲において平坦面をなす。口縁対角線上の対面する位置には、口縁基部に直径4mmを測る小孔がそれぞれ6.5cm間隔で穿たれている。焼成前穿孔である。



第17図 北野遺跡05-1区出土遺物

第3節 04-2区の調査

1. 位置 (第15、16図)

調査区は遺跡の南西部に位置する。現信達大苗代集落の西端にあつて、国道26号「大苗代西」交差点を南に約100m下つた地点である。地形的には低位段丘に属する。南約15mに04-3区、西に04-1区、北西約80mに85-2区^⑨、北東約40mに99-1区^⑩、東約20mに89-1区^⑪がそれぞれ位置している。また、平安時代後期の集落が確認された地点へは北東へ約150m程離れている。

現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 4、9)

盛土(1層、約90cm)を除去すると、耕作土である灰黒色シルト(2層、約15cm)があり、淡灰褐色混じり暗橙色土(3層、約10cm)、淡褐色砂質シルト(4層、約40cm)と続き、トレンチ東端においては地山である暗黄褐色礫混粘土へと至る。このうち4層は土師器細片を含む。

後述するようにトレンチの大半が遺構に含まれており、原状を確認できるのはトレンチ東端部に限られるが、地山は概ね平坦であり標高は15.3mを測る。地山面において遺構が確認された。

3. 遺構 (P.L. 4、9)

遺構はトレンチ東端部において東肩が確認されたにとどまり、全容は不明である。断面形状ならびに基底部の状況より溝と考えられる。現状では検出長1.2m、最大幅1.6m、深さ0.3mを測る。肩はやや湾曲しており、トレンチ北半において西方向に若干張り出すものの、ほぼ直線的に伸びるものと考えられ、軸方向はN-15°-Wに向ける。断面形状は浅い船底状を呈するものと考えられ、底部の標高は14.8mを測り、概ね平坦であるが北方向にわずかに傾斜する。埋土は1層であり、淡暗褐色シルト(5層)である。埋土には土師器細片が多く含まれているが、いずれも図化しえず、詳細は不明である。埋土の様子から遺構は一様に埋没したものと考えられる。また断面観察や遺物の出土状況により第4層についても溝の埋土であると考えることが可能であり、本来の掘方はさらに東に広がるのかも知れない。また4、5層については、次節で述べる04-3区の状況と共通するものである。

第4節 04-3区の調査

1. 位置 (第15、16図)

調査区は遺跡の南西部に位置し、前節04-2区の北10mに位置する。

現況は更地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 4、9)

盛土(1層、約60~90cm)はトレンチ東端において最も薄く、トレンチ西半では7層にまで攪乱が及ぶ。トレンチ東半においては盛土以下、耕作土である淡暗灰褐色土(2層、約10cm)、灰

橙色土（3層、約10cm）、さらに旧耕作土である褐色混じり暗黄褐色土（4層、約10～20cm）、灰褐色混じり暗橙色土（5層、約10cm）、暗灰褐色土（6層、約10cm）の各層が水平堆積をみせる。3層、5層は床土である。以下に、淡褐色砂質シルト（7層、約30cm）、淡暗褐色シルト（8層、約40cm）がほぼ水平に堆積し、暗黄褐色礫混粘土の地山へと至る。地山は概ね平坦であり、標高は15.0mを測る。7層及び8層より古代の遺物が多く出土した。

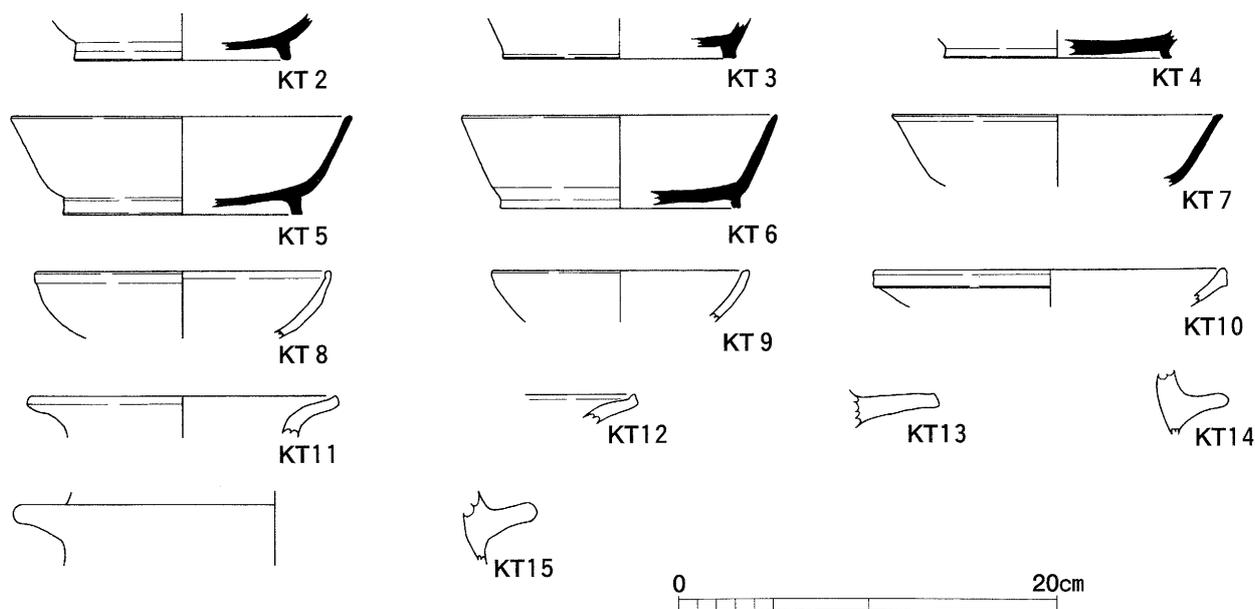
本調査区における7、8層は、04-2区の遺構埋土と共通するものであり、平面的に確認することはできなかったが、トレンチ全体が04-2区の溝に含まれるものと考えてよいだろう。これにより溝の延長は15mを越えるものであることが明らかである。

3. 遺物（PL. 12、第18図）

遺構埋土と捉えることのできる7、8層より多くの遺物が出土している。多くは細片化した土師器であったが、中に須恵器や灰釉陶器も含まれている。KT4、6は須恵器、KT2、3、5、7は灰釉陶器、KT8～15は土師器である。

KT4、6は須恵器杯である。KT6は底部より直線的に立ち上がる体部を持ち、口縁端部は丸く取める。KT4、6ともに高台は強いナデによって内湾する。底部外面はヘラケズリによる。

KT2、3、5、7は灰釉陶器碗である。KT7は底部を欠くが、その他についてはいずれも付高台を有する。高台から内湾しつつ、丸みを帯びて立ち上がるもの（KT2、5、7）、高台から外傾しつつ直線的に立ち上がるもの（KT3）がある。高台はいずれも断面方形であり、底部よりほぼ垂下するもの（KT3）、ハ字状に開くもの（KT2、5）がある。KT5、7は内湾しつつ立ち上がる体部にわずかに外反する端部を持つ。いずれも部分的に透明から暗オリーブ色の施釉がなされている。KT5は付高台を有する底部より、内湾しつつ立ち上がる直線的な体部を持ち、口縁はわずかに外反し、端部が平坦面をなす。高台は断面方形を呈し、やや外側に開



第18図 北野遺跡04-3区出土遺物

く。底部外面はヘラケズリが施され、その他はナデにより平滑に仕上げられる。部分的ではあるが、高台から口縁部外面にわたって暗オリーブ色を呈する施釉がみられる。

K T 8、9は土師器杯である。いずれも緩やかに内湾する体部を持ち、K T 8の口縁端部はヨコナデによって端部が肥厚する。K T 9は内外面ともヘラミガキが施される。K T 8は器壁が剥離しており、詳細は不明である。K T 10～K T 12は土師器甕である。K T 10は口縁端部にナデによる垂直面を持ち、K T 11、12は端部を摘みあげ上方に突起を有する。K T 10は直線気味に開く口縁であり、K T 11、12の口縁は外反する。K T 13～15は土師器羽釜である。K T 13は鏝部のみであるが、幅広であり、端部に下方に傾斜する平坦面を持つ。K T 14、15は体部から上方に伸びる鏝部を持ち、端部は丸く収める。K T 14、15は白色砂粒を多く含む明赤褐色の胎土を持つことから、搬入品であると考えられる。

以上、7、8層出土遺物を概観したが、これらの遺物は概ね9世紀前半に位置づけることができる。中でも灰釉陶器と土師器羽釜の割合が高いことが注目され、市域では当該期の資料がさほど多いわけではないが、こうした現象が集落の性格に起因する可能性もあり、注意を要する。

- 註 ① 泉南市教育委員会「北野遺跡00-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XVIII』(2001)
泉南市教育委員会「北野遺跡01-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIX』(2002)
- ② 泉南市教育委員会「55-7地区」『男里遺跡発掘調査報告書 II』(1981)
- ③ 泉南市教育委員会『北野遺跡発掘調査報告書』(2003)
- ④ 泉南市教育委員会「北野遺跡99-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XIX』(2002)
- ⑤ 平成16年度、泉南市教育委員会による調査。『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXII』(2005)にトレンチ位置掲載。
また本文中にあるのはその後の本調査の成果による。
- ⑥ 泉南市教育委員会『大苗代遺跡発掘調査報告書』(2002)
- ⑦ 泉南市教育委員会「新伝寺遺跡・北野遺跡04-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXII』(2005)
- ⑧ ⑥と同じ

第6章 上村遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1、2）

上村遺跡は市域東部にあって、いわゆる新家三谷と称される新家川と柳谷川によって形成される谷地形の、ほぼ中央に位置する。新家上村集落の北西端とその北に広がる耕作地を含むもので、地形的には新家川右岸の沖積段丘に立地する。

本遺跡は分布調査^①により周知されたものであるが、今年度調査区の南隣接地にあたる99-1区を除いては、調査はまったく行われておらず、その内容については不明と言わざるを得ない。

新家谷の谷筋にそって点在する遺跡群は、総じて調査例が少ないが、谷の南東端に位置する宮遺跡、宮南遺跡^③、谷の北東部に位置する新家遺跡^④、下村遺跡^⑤などにおいて弥生時代の遺構、遺物が確認されている。一方、新家谷の開発は14世紀後半からはじまり、本格的には15世紀前半に開始されたことが文献史料^⑥に明らかである。今後データの蓄積が進めば、こうした文献史料を裏付ける成果の得られることが期待される。

第2節 05-1区の調査

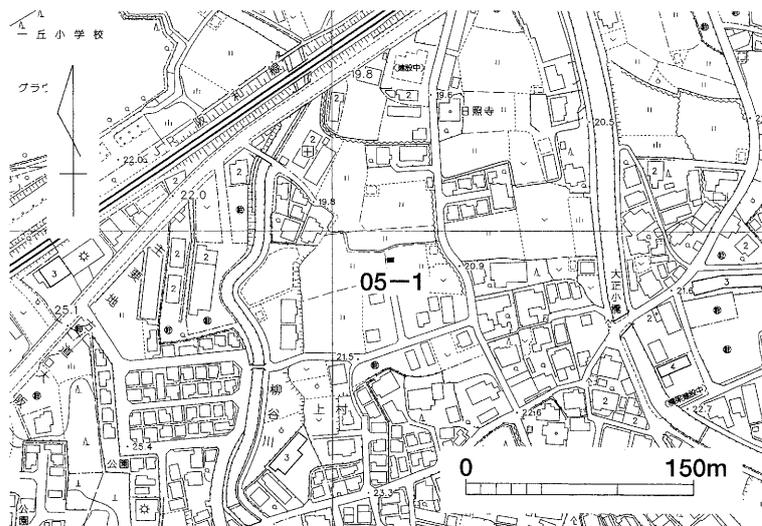
1. 位置（第19、20図）

調査区は遺跡の中央、東寄りに位置する。府道大阪和泉泉南線「新家川橋」交差点の南東約200mに位置し、現新家上村集落の北西端^⑦に接する。地形的には新家川右岸の沖積段丘面上に立地する。調査区の南に面して99-1区が位置する。

調査区の現況は休耕地であり、トレンチは1ヵ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 4、10）

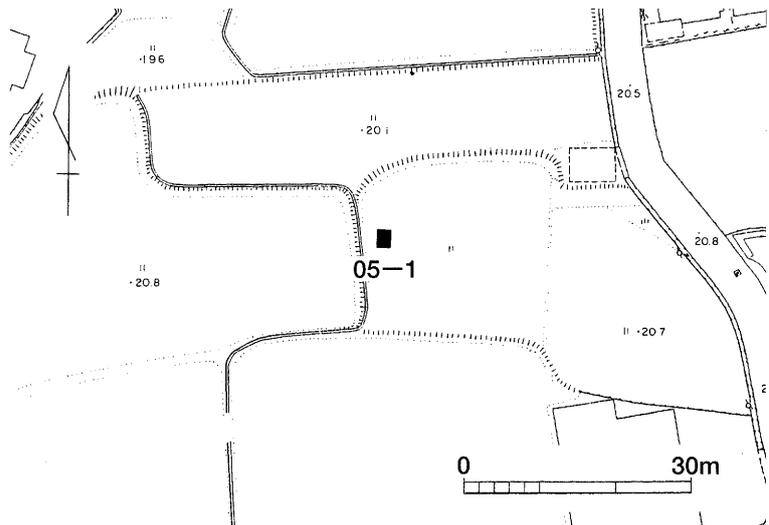
現代滋味土である灰黒色土（1層、約20cm）と床土である暗橙褐色土（2層、約10cm）及び褐色混じり端灰褐色砂質土（3層、約10cm）がいずれも水平堆積をみせ、さらに淡灰褐色砂質土（4層、約20～30cm）、淡橙色砂質シルト（5層、約10cm）、明灰褐色シルト（6層、約10cm）と続く。4層は旧耕作土、5層及び6層はその床土である。これらも5層上面に若干の起伏がみ



第19図 上村遺跡調査区位置図

られるものの、概ね水平堆積である。

6層直下に地山である淡黄褐色シルトが拡がる。湧水を伴い、やや軟弱であるが、40cm程掘り下げても状況に変化がみられないことから、地山であると判断した。上面の状況は概ね平坦であり、標高は21.2mを測る。地山上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。またいずれの層位からも遺物は出土しなかった。



第20図 上村遺跡05-1区地形図

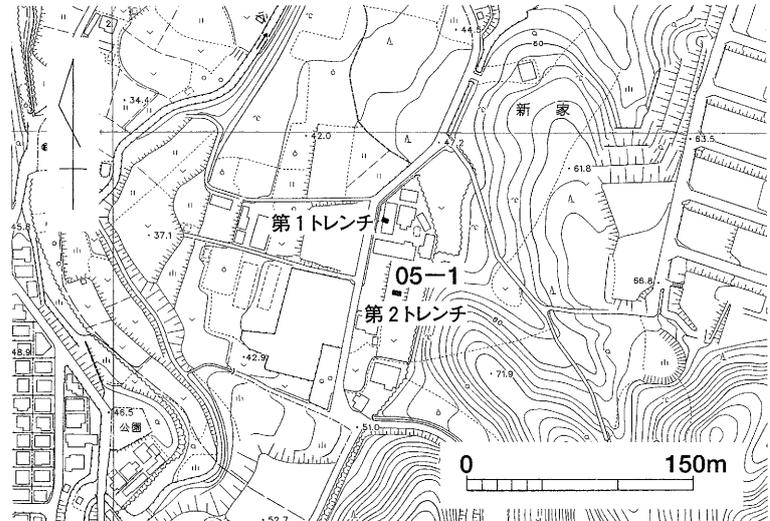
以上の調査成果を99-1区と比較すると、地形的に本調査区の方がわずかに低いものの、確認された層序はほぼ共通している。土地利用の変遷が同じであったものと考えられる。

- 註 ① 泉南市教育委員会「Ⅲ 事業の概要」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
② 泉南市教育委員会「上村遺跡99-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』(2000)
③ 平成9年度、泉南市教育委員会による調査
④ 泉南市教育委員会「新家遺跡」『泉南市文化財年報No.1』(1995)
泉南市教育委員会「新家遺跡96-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)
⑤ 泉南市教育委員会「下村遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』(1996)
⑥ 泉南市史編纂委員会「第3章 戦国時代の泉南地方」『泉南市史 通史編』(1987)
⑦ ②と同じ

第7章 石ヶ原遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1、2）

石ヶ原遺跡は市域東部、新家川と柳谷川によって形成された谷地形の南端に位置する。地形的には丘陵の西麓及び中位段丘にあたる。大きくは西に向かって傾斜する緩やかな斜面上に位置し、西端から約100m西には柳谷川が流れる。また南には丘陵が迫り、遺跡の南限を画する。遺跡の北約150mには段丘上の谷を利用して上野池が築造されている。



第21図 石ヶ原遺跡調査区位置図

遺跡は本市教育委員会による分布調査^①によって発見されたもので

あり、中近世の散布地として知られる。いわゆる新家谷の中でも西端の谷筋に属し、同じ谷筋に沿って上村遺跡、上野中道遺跡、芋堀遺跡、高倉山南遺跡などが知られるが、上村遺跡^②、芋堀遺跡^③を除いては調査が行われておらず、その内容は不明である。また新家上村集落より南には旧来の集落はない。

新家地区に伝わる『日輪山清明寺代々記并三谷古記』には13世紀後半から新家谷の開発が開始され、平地に近い谷の開口部より徐々に奥に向かって開発の進んだことが記されている^④。しかしながら直接的に本遺跡周辺の状態を示す記事はなく、考古学的にもそれを実証できるものはないものの、谷の南端に位置することから、新家谷における開発順位としては後発するものと考えられよう。

また周囲に目を転ずると、遺跡の東側に接する丘陵の東斜面に宮遺跡、宮南遺跡^⑤があり、ここでは弥生時代中期の遺物が散見される。こうした遺物が丘陵上部から流出したものと仮定すれば、同丘陵の西麓に位置する本遺跡についても、同様の状況が確認される可能性はある。

第2節 05-1区の調査

1. 位置（第21図）

調査区は遺跡のほぼ中央に位置する。基盤山地より舌状に張り出す丘陵の北西裾にあって、調査区より北西方向には谷地形が大きく広がる。調査区の北約100mには谷地形を堰きとめて築造された上野池が存在する。谷の東西に広がる丘陵はいずれも大規模な宅地として開発が進んでいる。特に東側の丘陵の開発に先立つ調査においては弥生時代の遺物が出土し、宮遺跡、宮南遺跡

として周知されている。調査区の北西約200mに芋掘遺跡01-1区^⑥が位置している。

現況は更地であるが、以前は養鶏場であった。トレンチは2ヵ所設定し、北より第1、2トレンチと呼称する。

2. 層位と遺物の出土状況 (PL. 4、10)

第1トレンチでは、盛土(1層、約80cm)を除去すると、トレンチ西半では淡黄白色砂質土(2層、約20cm)が、トレンチ中央部から東半部においては耕作土である暗灰色土(3層、約20cm)がみられる。3層はトレンチ中央部において浅い溝状の肩を有することから、耕作の段をなすものである可能性が考えられる。以下に黄白色礫混土(4層、約30cm)及び淡黄色砂質シルトがみられる。これらは均質であることから地山であると捉えたが、元来の丘陵面もしくは段丘面はさらに下に存在する可能性が高い。4層上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。また遺物も出土しなかった。

第2トレンチは調査区の南端、現状の丘陵裾に面したところに設定した。コンクリート土間を除去すると、耕作土である暗灰色土(1層、約20cm)及び床土である暗橙色土(2層、約5cm)があり、黄白色礫混土(3層、約10cm)、淡黄色砂質シルトへと続く。淡黄色砂質シルトは約70cm以上続くものである。3層上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。また遺物も出土しなかった。

註 ① 泉南市教育委員会「Ⅲ 事業の概要」『泉南市文化財年報No.1』(1995)

② 本書前節「上村遺跡05-1区の調査」

泉南市教育委員会「上村遺跡99-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』(2000)

③ 泉南市教育委員会「芋掘遺跡01-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIX』(2002)

④ 泉南市史編纂委員会「第3章 戦国時代の泉南地方」『泉南市史 通史編』(1987)

⑤ 平成9年度、泉南市教育委員会による調査

⑥ ③と同じ

第8章 まとめ

本書では、平成17年1月1日より同年12月31日までの間に、文化財保護法に基づく発掘届出等にもとづいて行われた個人住宅等に伴う発掘調査及び確認調査、15件について報告している。以下にこれらの調査成果を概観し、今年度のまとめとしたい。

男里遺跡では5件の調査を報告した。05-1区は遺跡のほぼ中央部における調査であった。周辺における調査成果と同様に安定した地山面が確認され、地山面において遺構が確認された。遺構は灌漑用井戸と考えられ、時期的には明確には明確にはならなかったが、調査区がかつては耕作地であったことが事実となり、周辺の土地利用の変遷を知る貴重な手がかりが得られた。

05-2区は遺跡の北西部における調査であった。複数の耕作面が確認されたことで、継続的に生産地として利用されていたことが判明した。また周辺調査成果と同様、氾濫原に属する砂礫層が確認されたことで周辺の微地形をより明確に把握することができ、同時に耕地化に伴う整地業がより広範囲に及ぶものであることが明らかとなった。今後は整地業すなわち耕地化の時期的な追及が課題となる。

05-3区は遺跡北部における調査であった。調査区に隣接する府道建設に伴う調査により、平安時代集落が確認されており、その成果が期待されるものであった。周辺調査区では、包含層及び遺構は、本調査区における4層、すなわち黒褐色シルト層より上層で確認されているのに対し、本調査区では黒褐色シルト層の堆積が顕著ではなく、結果、遺構及び遺物が確認されなかった。こうしたことから周辺は堆積状況が均一ではないものと考えられ、本調査区周辺における遺構や包含層の有無は、既往の調査成果からでは判断しにくいものと考えられるに至った。

05-4区は遺跡北東端部において実施された。周辺は95年度に宅地化されたもので、以降、個人住宅建設に伴う調査が実施されている。遺跡内でも特に双子池北方において、特徴的に分布する黒褐色土層が良好に確認される地点として注目される。また本調査区の北に位置する99-6区^②では黒褐色土層より中世に属する遺物が多く出土していることから、本調査区の成果が期待された。結果、他の調査区と同様の層序が確認されたものの、99-6区の成果を追認することはできず、99-6区の内容を極めて限定的なものとして捉える必要がでてきた。

05-5区は遺跡の南東部にあり、西に府道が隣接する地点での調査であった。府道敷の調査^③においては中世の遺構がまとまって確認されている。調査では地山とも考えられる砂礫層とその直上の堆積層が確認されたが、遺構の確認には至らなかった。しかしながら確認された砂礫層直上の状況は、先の府道敷の調査において中世遺構面をなすものと対応しており、中世集落が本調査区周辺にも及ぶ可能性が指摘できる。

04-5区は遺跡の南東部、現馬場集落内における調査であった。周辺での調査例はさほど多くないものの、調査区西隣において確認されている中世集落^④の追認が期待された。結果、河川性堆積による砂礫層が確認され、周辺には想像以上の微地形が隠されていること、また遺構はおろか遺物も確認されなかったことから、中世集落の範囲がより限定されることとなった。地形的な条件に起因されるものと考えられるが、集落の内容把握とともに今後の課題である。

岡中西遺跡では2件の調査を報告した。05-1区は遺跡の北東部、現信達岡中集落内における調査であった。結果、調査区内においても耕作面以下の堆積状況が一様ではなく、さらに地山とは確

認められなかったが、汎濫原に属する砂礫層が確認された。遺跡発見の契機となった府道敷の調査^⑤においては、砂礫層が遺構面をなすことから、中世集落がさらに広範囲に展開する可能性が出てきた。

04-1区は遺跡南西部での調査であった。府道敷に面し、中世集落の拡がり期待されたものである。複数の耕作面の下に砂礫による地山が確認され、上層には中世の遺物がわずかに含まれるといった状況であった。遺構の確認には至らなかったものの、周辺には確実に何らかの遺構が存在するであろう、そう匂わせる結果が得られた。

岡田遺跡では2件の調査を報告した。05-1区は遺跡北東部にあって、中世の遺構、遺物がかなりまとまって確認されている地点^⑥の東に位置し、その動向が注目された。調査では近代以降の整地土とその直下に厚く堆積する中世包含層、さらに性格は判然としないものの中世以前と考えられる土坑が確認された。中世集落がより東に拡がる可能性が出てきたものといえる。

05-2区は遺跡北部にあり、近年まで耕地として利用されてきた地点である。時期、性格ともに明確ではないものの、小規模な溝が確認された。遺構面上層には中世遺物がわずかに含まれることから、中世以前に属する可能性が高いものである。調査区が中世集落域に含まれる可能性もあり、周辺の調査では明確でなかったプライマリーな堆積が確認されたことの意義は大きい。

北野遺跡では3件の調査を報告した。いずれも遺跡南西部において、昨年度大規模な宅地開発が行われた区画内での調査である。05-1区では中世の灌漑用井戸が確認された。同様の遺構は昨年度実施された宅地開発に伴う04-1区^⑦の調査でも複数確認されており、中世の耕地開発がより明確なものとなった。

04-2区、04-3区においては古代の溝が確認された。9世紀前半の遺物がまとまって出土しており、周辺に当該期の集落の存在が確実視される。従前知られていた平安時代後期という遺跡の定点を大きく遡ることとなった。また出土遺物には灰釉陶器が多く含まれるなど、市域の他の遺跡とは様相を異にする事象もあり、注目される。

上村遺跡では1件の調査を報告した。05-1区は遺跡中央部にあり、現新家上村集落の北西に接する耕作地における調査であった。複数の耕作面と比較的安定した地山が確認された。隣接する99-1区^⑧を含め、継続的に生産地として利用されていたことが明らかとなった。想定される中世以降の集落は、現集落内に求められるのであろう。今後の動向に注目したい。

石ヶ原遺跡では1件の調査を報告した。分布調査以降、初めての調査であり、その内容が非常に注目されるものであった。05-1区は遺跡中央部にあたる。結果、遺構、遺物ともに確認されず、遺跡の内容究明に直接的に結びつくものは得られなかった。しかしながら地山と認定した厚い堆積層は、丘陵よりの流出土と捉えることができるもので、その時期的な追求が、中世の開発時期と密接にリンクするやも知れず、今後の調査における課題となるであろう。

註 ① 財大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1994）

② 泉南市教育委員会「男里遺跡99-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』（2000）

③ 財大阪府文化財センター『男里遺跡』（2005）

④ 平成2年度、泉南市教育委員会による90-10区の調査。『泉南市遺跡群発掘調査報告書VII』（1991）にトレンチ位置掲載。

⑤ 泉南市教育委員会「岡中西遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）

財大阪府埋蔵文化財協会『岡中西遺跡』（1988）

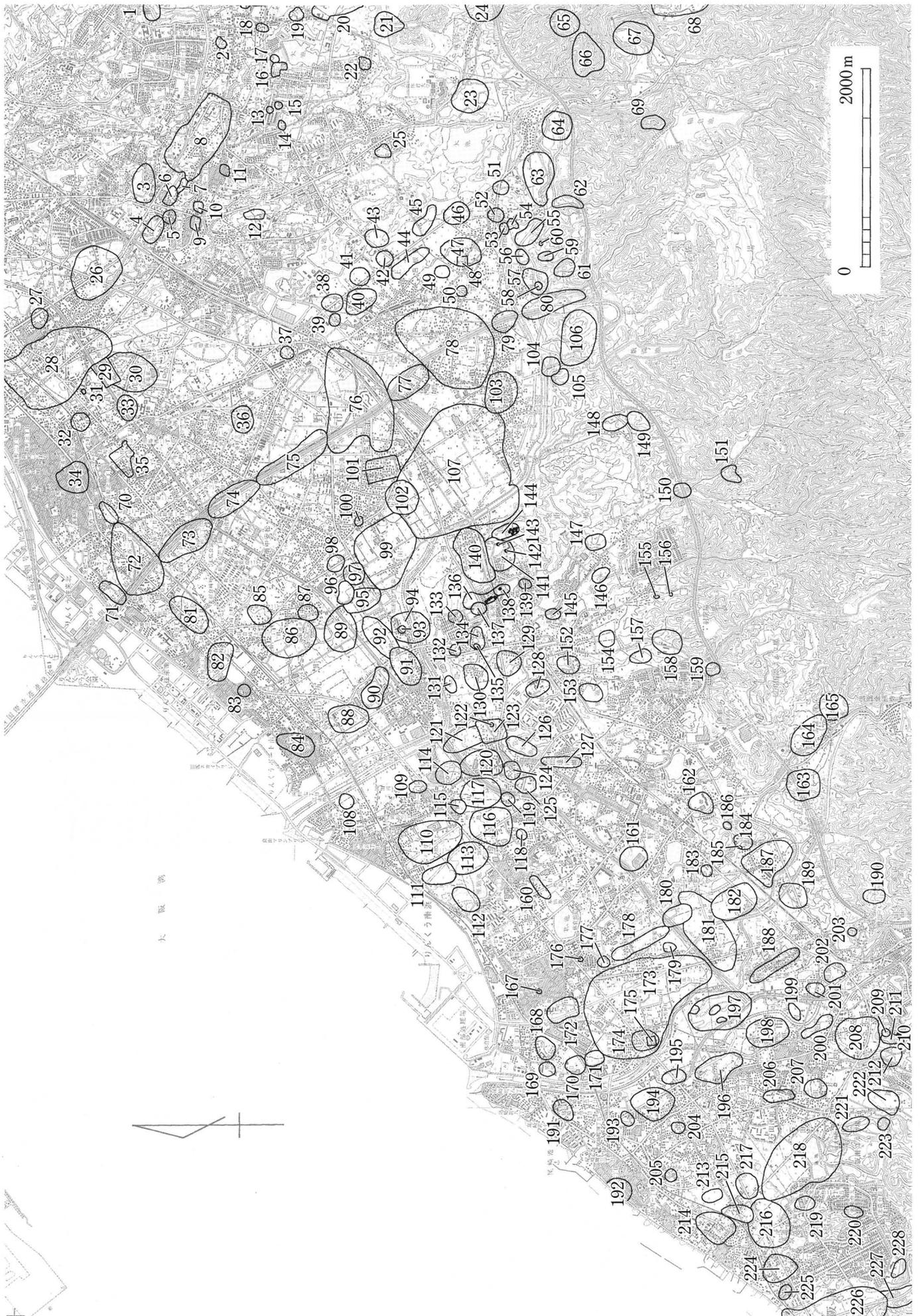
⑥ 泉南市教育委員会「岡田遺跡97-1区、97-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』（1998）

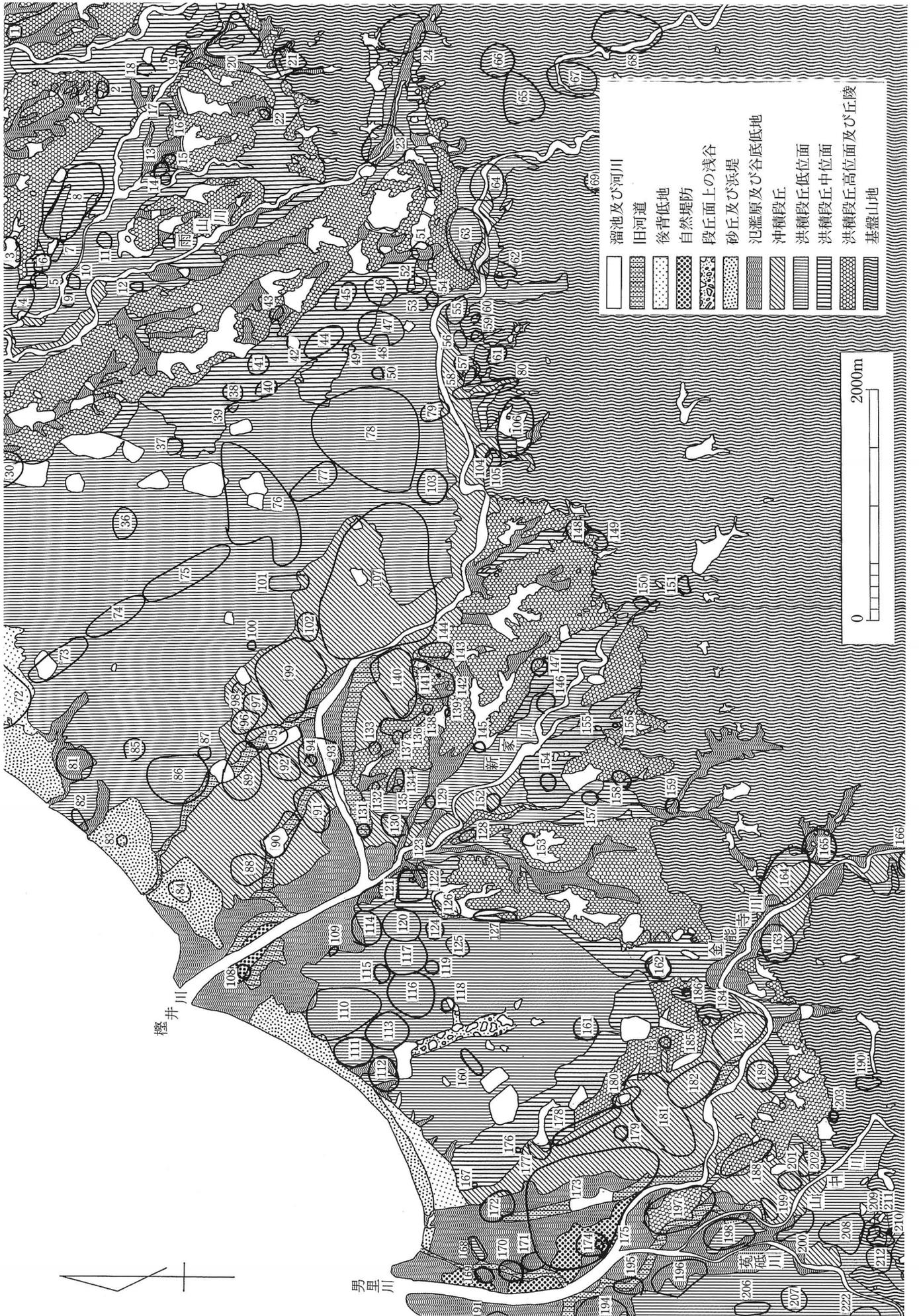
⑦ 平成16年度、泉南市教育委員会による調査。『泉南市遺跡群発掘調査報告書XXII』（2005）にトレンチ位置掲載。

⑧ 泉南市教育委員会「上村遺跡99-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XVII』（2000）

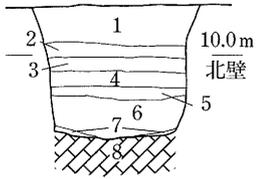
第5表 文化財一覧表

1	正法寺跡	47	野々宮遺跡	93	櫻井城跡	139	引谷池窯跡	185	林昌寺瓦窯跡
2	小垣内遺跡	48	総福寺天満宮本殿	94	奥家住宅	140	兔田遺跡	186	林昌寺銅鑄出土地
3	大谷池遺跡	49	宮ノ前遺跡	95	道ノ池遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	187	岡中遺跡
4	大久保B遺跡	50	垣外遺跡	96	岡ノ崎遺跡	142	フキアゲ山1号墳	188	高田山古墳群
5	下高田遺跡	51	屯田遺跡	97	中菖蒲遺跡	143	フキアゲ山2号墳	189	岡中西遺跡
6	紺屋遺跡	52	八王子遺跡	98	岸ノ下遺跡	144	兔田古墳群	190	雨山南遺跡
7	口無池遺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	99	諸目遺跡	145	池尻遺跡	191	福島遺跡
8	東門寺跡	54	日根神社遺跡	100	城ノ塚古墳	146	中の川遺跡	192	尾崎海岸遺跡
9	降井家屋敷跡	55	西ノ上遺跡	101	禪興寺跡	147	岩の前遺跡	193	馬川北遺跡
10	大久保C遺跡	56	川原遺跡	102	ダイジョウ寺跡	148	別所北遺跡	194	馬川遺跡
11	中家住宅	57	母山遺跡	103	上之郷遺跡	149	別所遺跡	195	下出北遺跡
12	大久保A遺跡	58	母山近世墓地	104	向井代遺跡	150	高野遺跡	196	室堂遺跡
13	五門北古墳	59	向井山遺跡	105	意賀美神社本殿	151	昭和池遺跡	197	平野寺(長楽寺)跡
14	五門遺跡	60	鏡塚古墳	106	向井池遺跡	152	上村遺跡	198	向出遺跡
15	五門古墳	61	梨谷遺跡	107	三軒屋遺跡	153	狐池遺跡	199	高田西遺跡
16	大浦中世墓地	62	笹ノ山遺跡	108	川原遺跡	154	上野中道遺跡	200	向山遺跡
17	大浦遺跡	63	土丸遺跡	109	岡田東遺跡	155	宮遺跡	201	高田南遺跡
18	甲田家住宅	64	土丸南遺跡	110	岡田遺跡	156	宮南遺跡	202	和泉鳥取遺跡
19	久保B遺跡	65	雨山城跡	111	氏の松遺跡	157	芋掘遺跡	203	雨山遺跡
20	鳥羽殿城跡	66	土丸城跡	112	座頭池遺跡	158	石ヶ原遺跡	204	内畑遺跡
21	墓の谷遺跡	67	下大木遺跡	113	岡田西遺跡	159	高倉山南遺跡	205	皿田池古墳
22	来迎寺本堂	68	大木遺跡	114	新伝寺遺跡	160	本田池遺跡	206	正方寺遺跡
23	池ノ谷遺跡	69	稲倉池北方遺跡	115	中小路北遺跡	161	上代石塚遺跡	207	西畑遺跡
24	成合寺遺跡	70	大西遺跡	116	中小路西遺跡	162	信之池遺跡	208	自然田遺跡
25	山ノ下城跡	71	松原遺跡	117	中小路遺跡	163	滑瀬遺跡	209	玉田山遺跡
26	山出遺跡	72	中開遺跡	118	坊主池遺跡	164	六尾遺跡	210	玉田山古墳群
27	上瓦屋遺跡	73	末廣遺跡	119	中小路南遺跡	165	六尾南遺跡	211	玉田山須臾器窯跡
28	湊遺跡	74	安松遺跡	120	北野遺跡	166	金熊寺遺跡	212	寺田山遺跡
29	壇波羅密寺跡	75	長滝遺跡	121	一岡神社遺跡	167	専徳寺遺跡	213	黒田西遺跡
30	壇波羅遺跡	76	植田池遺跡	122	海会寺跡	168	天神ノ森遺跡	214	鳥取北遺跡
31	佐野王子跡	77	郷ノ芝遺跡	123	海会寺瓦窯	169	キレト遺跡	215	鳥取遺跡
32	上町東遺跡	78	日根野遺跡	124	大苗代遺跡	170	高田遺跡	216	鳥取南遺跡
33	市場東遺跡	79	机場遺跡	125	仏性寺跡	171	男里北遺跡	217	黒田南遺跡
34	若宮遺跡	80	棚原遺跡	126	海菅宮池遺跡	172	戎畑遺跡	218	神光寺(蓮池)遺跡
35	上町遺跡	81	羽倉崎東遺跡	127	市場遺跡	173	男里遺跡	219	三味谷遺跡
36	俵屋遺跡	82	羽倉崎遺跡	128	向井山遺跡	174	光平寺跡	220	三升五合山遺跡
37	北尻遺跡	83	嘉祥神社本殿	129	新家遺跡	175	光平寺石造五輪塔	221	小口谷遺跡
38	岡口遺跡	84	道ノ池遺跡	130	下村遺跡	176	樽井南遺跡	222	井関遺跡
39	中嶋遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	131	下村北遺跡	177	男里東遺跡	223	石田山遺跡
40	小塚遺跡	86	船岡山遺跡	132	下村1号墳	178	長山遺跡	224	西鳥取遺跡
41	十二谷遺跡	87	岡本庵寺	133	新家オドリ山東遺跡	179	山ノ宮遺跡	225	戎遺跡
42	丁田遺跡	88	田尻遺跡	134	新家オドリ山遺跡	180	前田池遺跡	226	貝掛遺跡
43	新池尻遺跡	89	船岡山南遺跡	135	下村2号墳	181	幡代遺跡	227	金剛寺遺跡
44	大坪遺跡	90	夫婦池遺跡	136	新家古墳群	182	幡代南遺跡	228	塚谷古墳群
45	市堂遺跡	91	櫻井西遺跡	137	新家オドリ山南遺跡	183	奥ノ池遺跡		
46	北ノ前遺跡	92	藤波遺跡	138	フキアゲ山西遺跡	184	林昌寺跡		



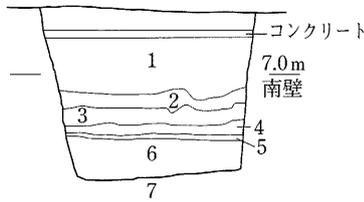


P.L. 3 男里遺跡、岡中西遺跡、岡田遺跡①調査区



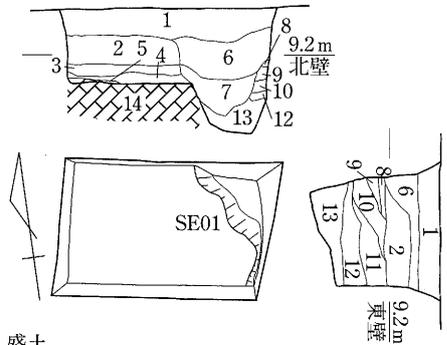
- 1.盛土
- 2.暗黒色土(耕作土)
- 3.橙色混じり淡灰褐色土(床土)
- 4.淡灰褐色砂質土(旧耕作土)
- 5.淡暗褐色礫混シルト
- 6.暗褐色シルト
- 7.淡黄灰色礫混土
- 8.黄褐色粘土

ON05-4区断面図



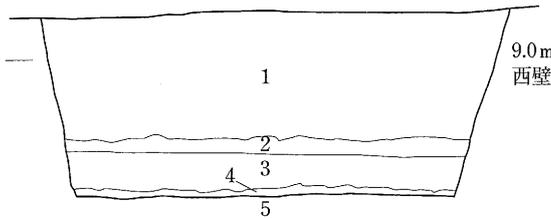
- 1.盛土
- 2.暗灰褐色砂質シルト(耕作土)
- 3.暗橙色混じり暗灰褐色砂質土(床土)
- 4.淡灰白色砂質土(Mg粒多含、旧耕作土)
- 5.明橙色粘土(床土)
- 6.淡暗灰褐色砂質シルト(Mg粒多含、旧耕作土)
- 7.淡暗灰褐色礫混土

ON05-2区断面図



- 1.盛土
- 2.暗橙色混じり暗灰黒色砂質土(耕作土)
- 3.暗灰褐色混じり黄褐色粘土
- 4.暗褐色シルト
- 5.淡灰褐色土
- 6.暗黄色混じり灰黒色土(黄褐色ブロック多含)
- 7.暗青灰色砂質シルト(黒色砂~シルト僅含)
- 8.灰色砂
- 9.黄白色粘土
- 10.暗灰色粘土(Fe粒含)
- 11.淡黄白色土
- 12.明青灰色粘土(Fe粒多含)
- 13.暗青灰色粘土(植物遺体含)
- 14.にぶい黄褐色粘土

ON05-1区平面図及び断面図

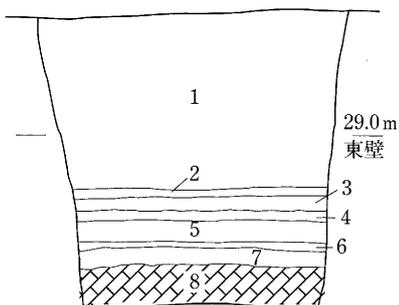
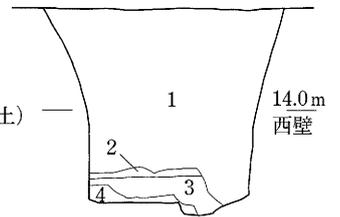


- 1.盛土
- 2.灰褐色シルト(旧耕土)
- 3.黄褐色シルト(床土)
- 4.黒褐色シルトブロック混じり灰色礫
- 5.灰色礫混じり灰白色粗砂

ON05-3区断面図

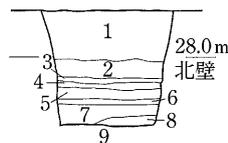
- 1.盛土
- 2.淡褐色混じり灰白色砂質土(床土)
- 3.淡暗黄褐色礫混シルト
- 4.暗黄褐色礫混土

ON05-5区断面図



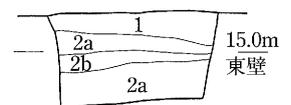
- 1.盛土
- 2.灰黒色土(耕作土)
- 3.橙色粘土(床土)
- 4.暗灰褐色礫
- 5.淡暗褐色シルト
- 6.淡橙色シルト
- 7.淡暗褐色砂質シルト
- 8.暗灰褐色礫

OKW04-1区断面図



- 1.盛土
- 2.淡灰褐色土(耕作土)
- 3.暗橙色土(床土)
- 4.淡暗褐色土(床土)
- 5.灰褐色混じり淡褐色砂
- 6.明灰色粘土
- 7.黄白色細砂
- 8.淡褐色砂
- 9.明灰白色砂(橙色粒多含)

OKW05-1区断面図



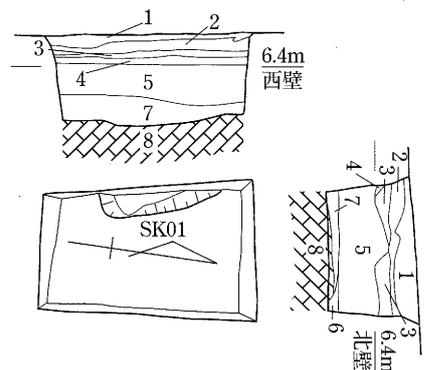
- 1.盛土
- 2a.淡褐色礫混土
- 2b.淡褐色礫

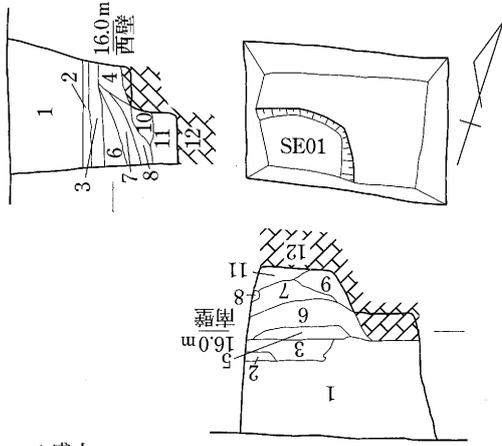
ON04-5区断面図



- 1.盛土
- 2.淡灰黒色シルト(耕作土)
- 3.暗灰白色砂質土(床土)
- 4.暗灰黒色土
- 5.黒灰色砂(炭含)
- 6.灰白色砂
- 7.淡暗褐色シルト(地山ブロック僅含)
- 8.暗黄褐色礫混土

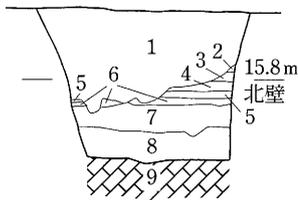
OKD05-1区平面図及び断面図





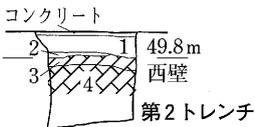
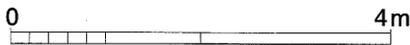
- 1.盛土
- 2.淡灰褐色砂質土 (耕作土)
- 3.淡黄灰褐色砂質土 (床土)
- 4.淡灰褐色礫混土 (Mg粒多含)
- 5.淡灰褐色砂質シルト
- 6.淡灰黄褐色礫混粘土
- 7.灰白色礫混粘土
- 8.暗褐色混じり灰褐色シルト
- 9.暗灰黄褐色礫混土
- 10.灰褐色混じり淡黄褐色礫混土
- 11.明灰白色シルト~粘土 (暗褐色ブロック、Mg粒多含)
- 12.淡橙褐色礫混粘土

KT05-1 区平面図及び断面図

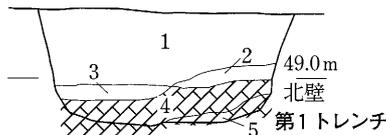


- 1.盛土及び攪乱
- 2.淡暗灰褐色土 (耕作土)
- 3.灰橙色土 (床土)
- 4.褐色混じり暗黄褐色土 (旧耕作土)
- 5.灰褐色混じり暗橙色土 (床土)
- 6.暗灰褐色土 (Mg粒多含)
- 7.淡褐色砂質シルト
- 8.淡暗褐色シルト
- 9.暗黄褐色礫混粘土

KT04-3 区断面図

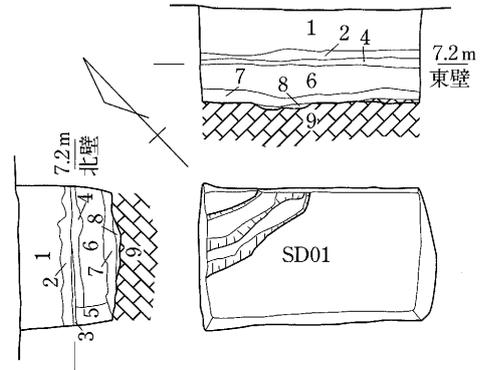


- 第2トレンチ
- 1.暗灰色土 (耕作土)
 - 2.暗橙色土 (床土)
 - 3.黄白色礫混土 (Mg粒多含)
 - 4.淡黄色砂質シルト



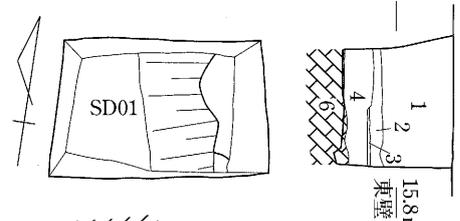
- 第1トレンチ
- 1.盛土
 - 2.淡黄白色砂質土
 - 3.暗灰色土 (耕作土)
 - 4.黄白色礫混土 (Mg多含)
 - 5.淡黄色砂質シルト

IH05-1 区断面図



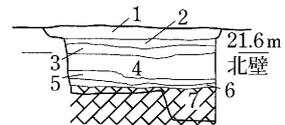
- 1.盛土
- 2.淡暗灰色砂質土 (耕作土)
- 3.明橙色粘土 (床土)
- 4.暗橙色混じり淡灰褐色砂質土 (床土)
- 5.淡灰褐色砂質土
- 6.淡灰褐色混じり淡褐色砂質土 (旧耕作土)
- 7.暗褐色混じり灰褐色砂質土
- 8.淡灰褐色シルト (地山ブロック、Mg粒多含)
- 9.明黄褐色粘土

OKD05-2 区平面図及び断面図



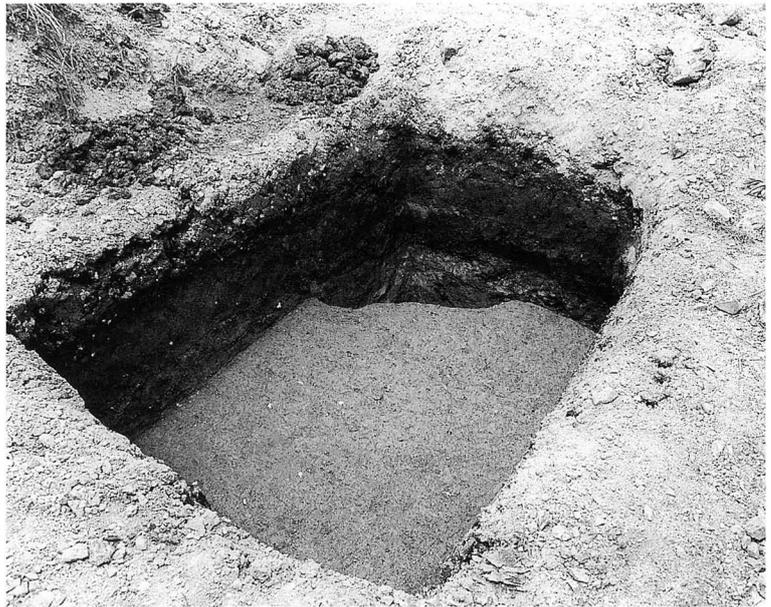
- 1.盛土
- 2.灰黒色シルト (耕作土)
- 3.淡灰褐色混じり暗橙色土 (床土)
- 4.淡褐色砂質シルト
- 5.淡暗褐色シルト
- 6.暗黄褐色礫混粘土

KT04-2 区平面図及び断面図



- 1.灰黒色土 (耕作土)
- 2.暗橙褐色土 (床土)
- 3.褐色混じり淡灰褐色砂質土 (床土、Mg粒多含)
- 4.淡灰褐色砂質土 (旧耕作土、Mg粒多含)
- 5.淡褐色砂質シルト (床土)
- 6.明灰褐色シルト (床土、Mg粒多含)
- 7.淡黄褐色シルト

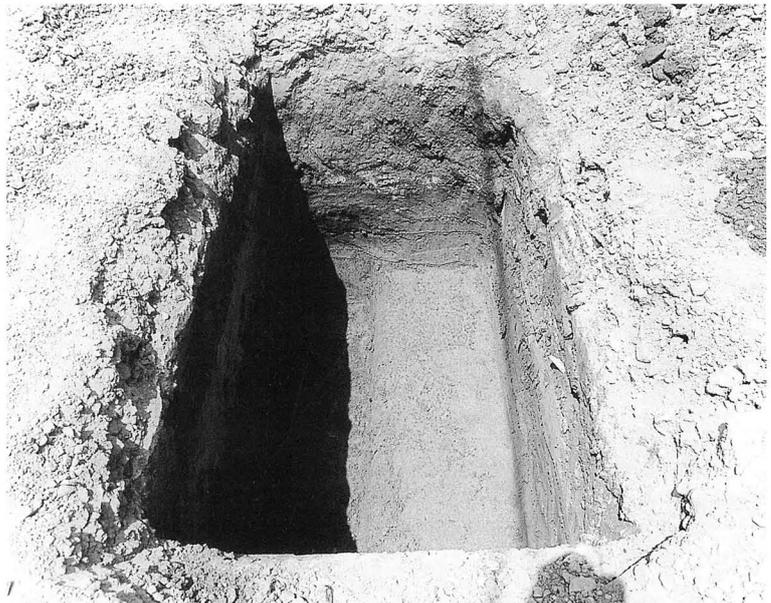
KM05-1 区断面図



ON05-1区
(南西から)



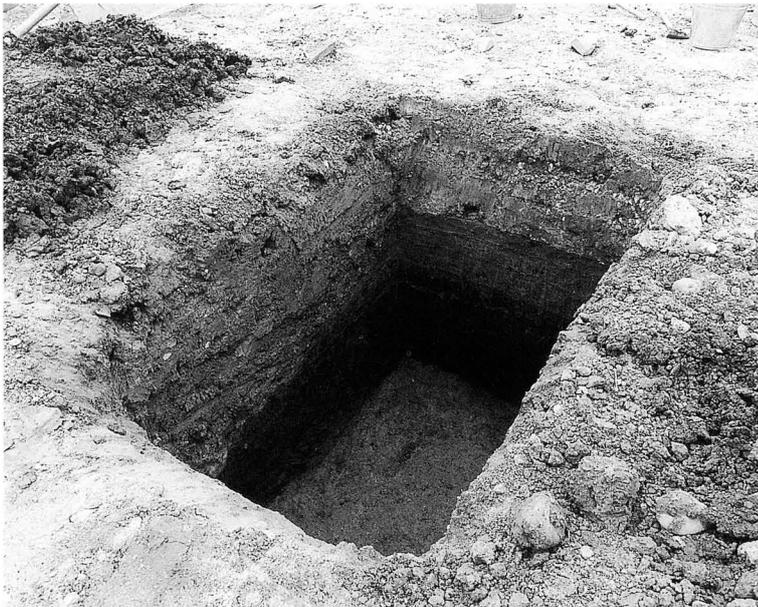
同上詳細
(西から)



ON05-2区
(東から)



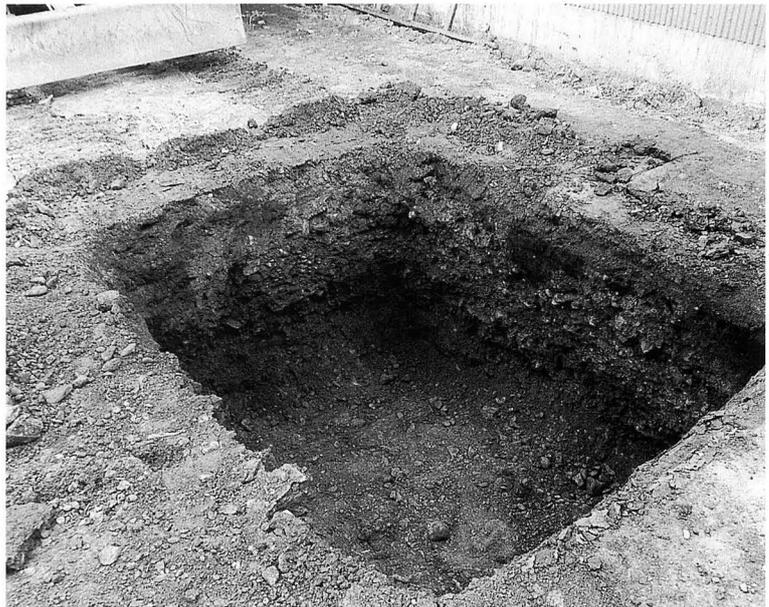
ON05-3区
(南東から)



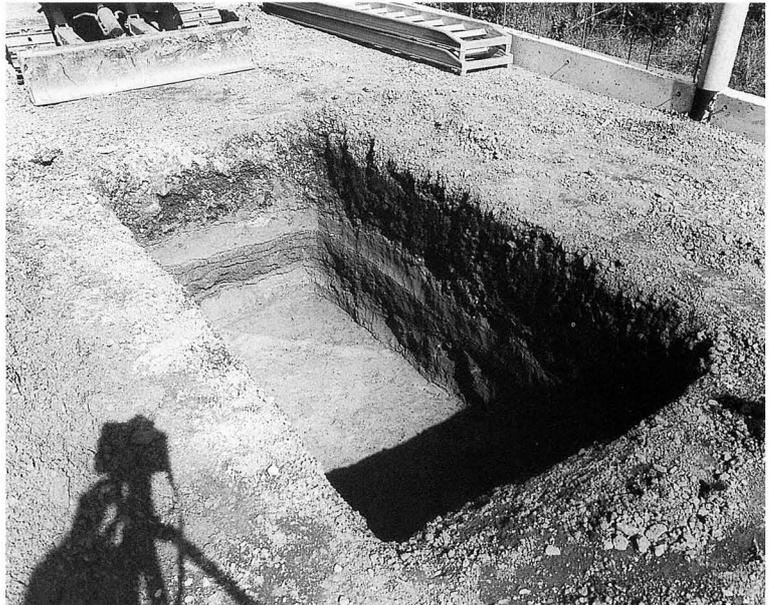
ON05-4区
(南西から)



ON05-5区
(南西から)



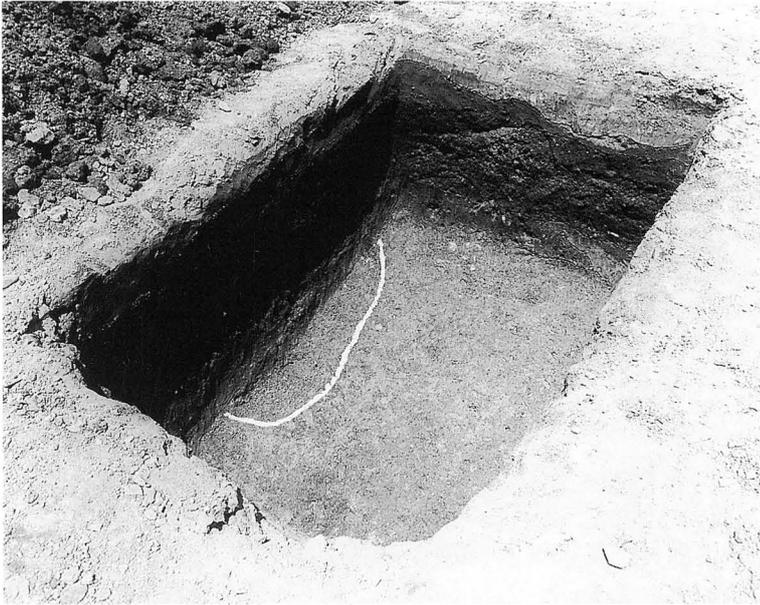
ON04-5区
(南西から)



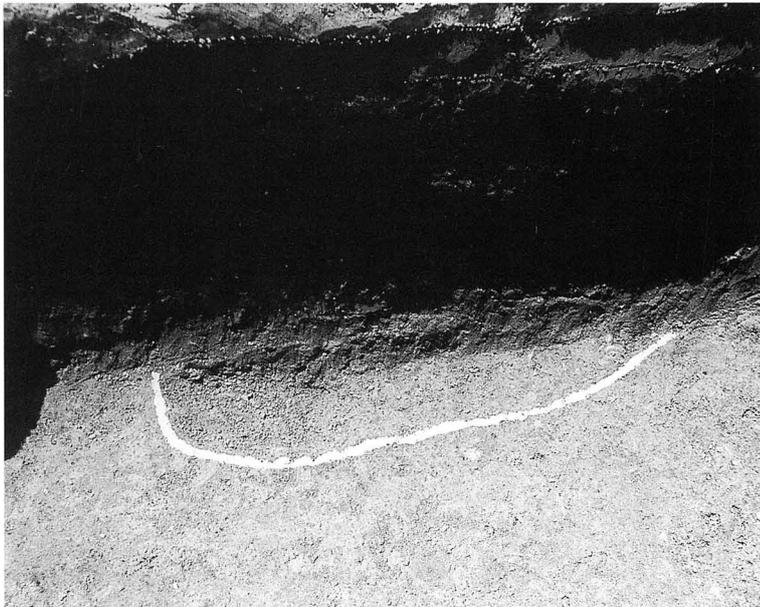
OKW05-1区
(南西から)



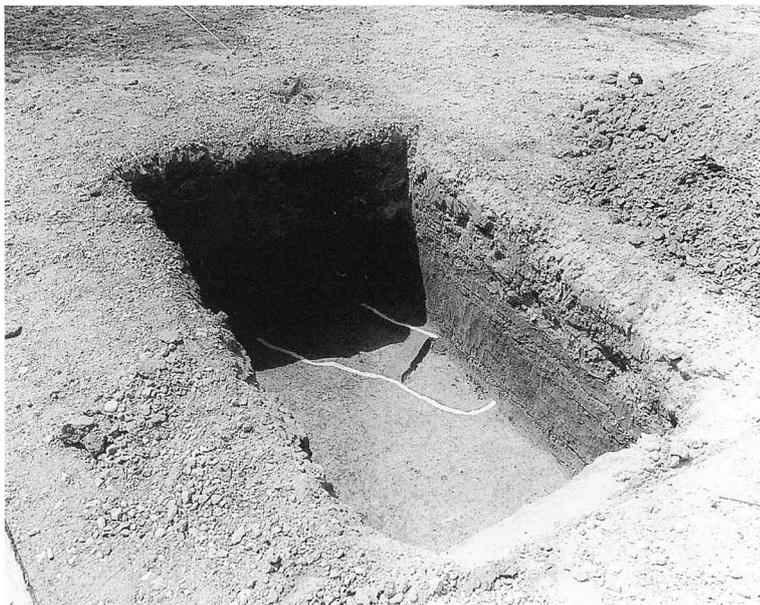
OKW04-1区
(北から)



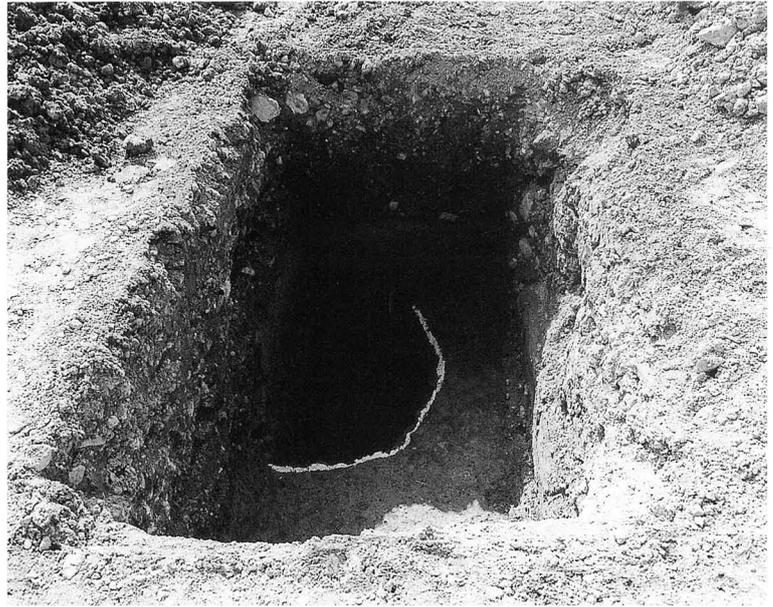
OKD05-1区
(南西から)



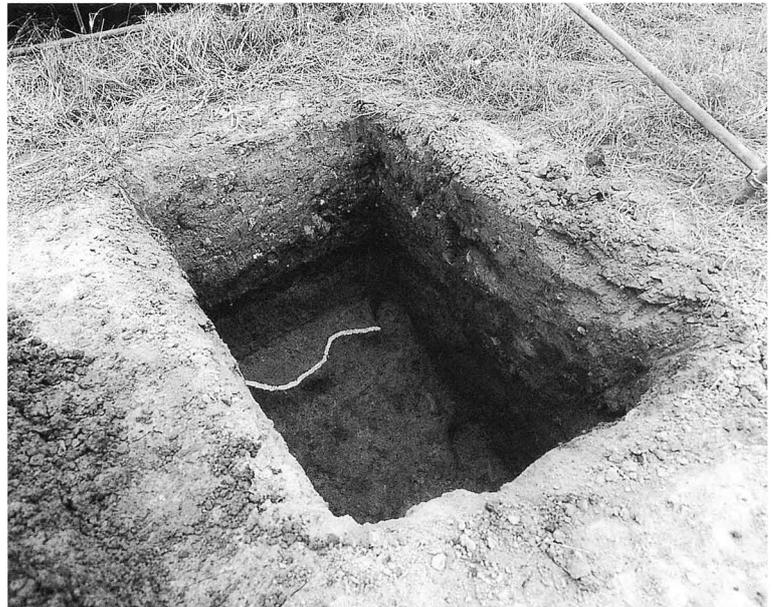
同上詳細
(東から)



OKD05-2区
(南から)



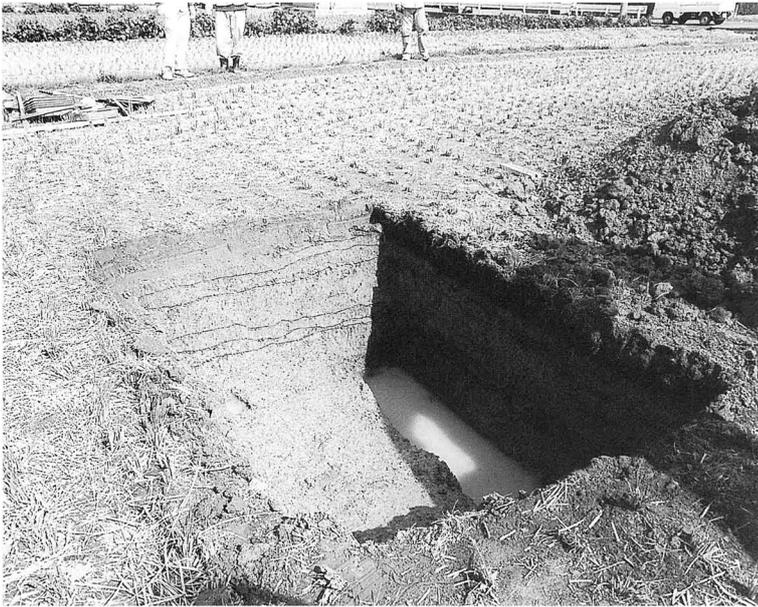
K T 05 - 1 区
(北東から)



K T 04 - 2 区
(南西から)



K T 04 - 3 区
(南西から)



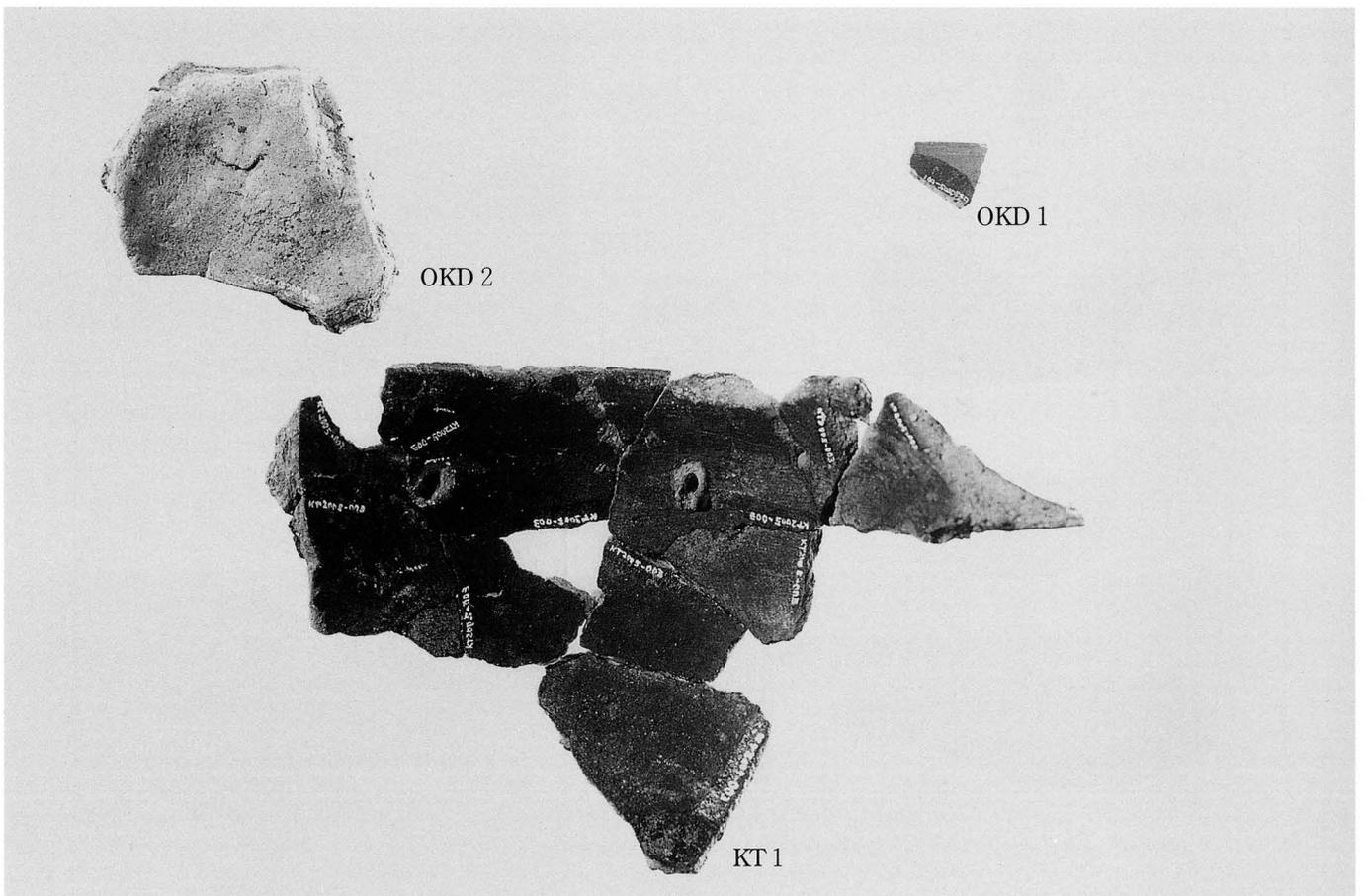
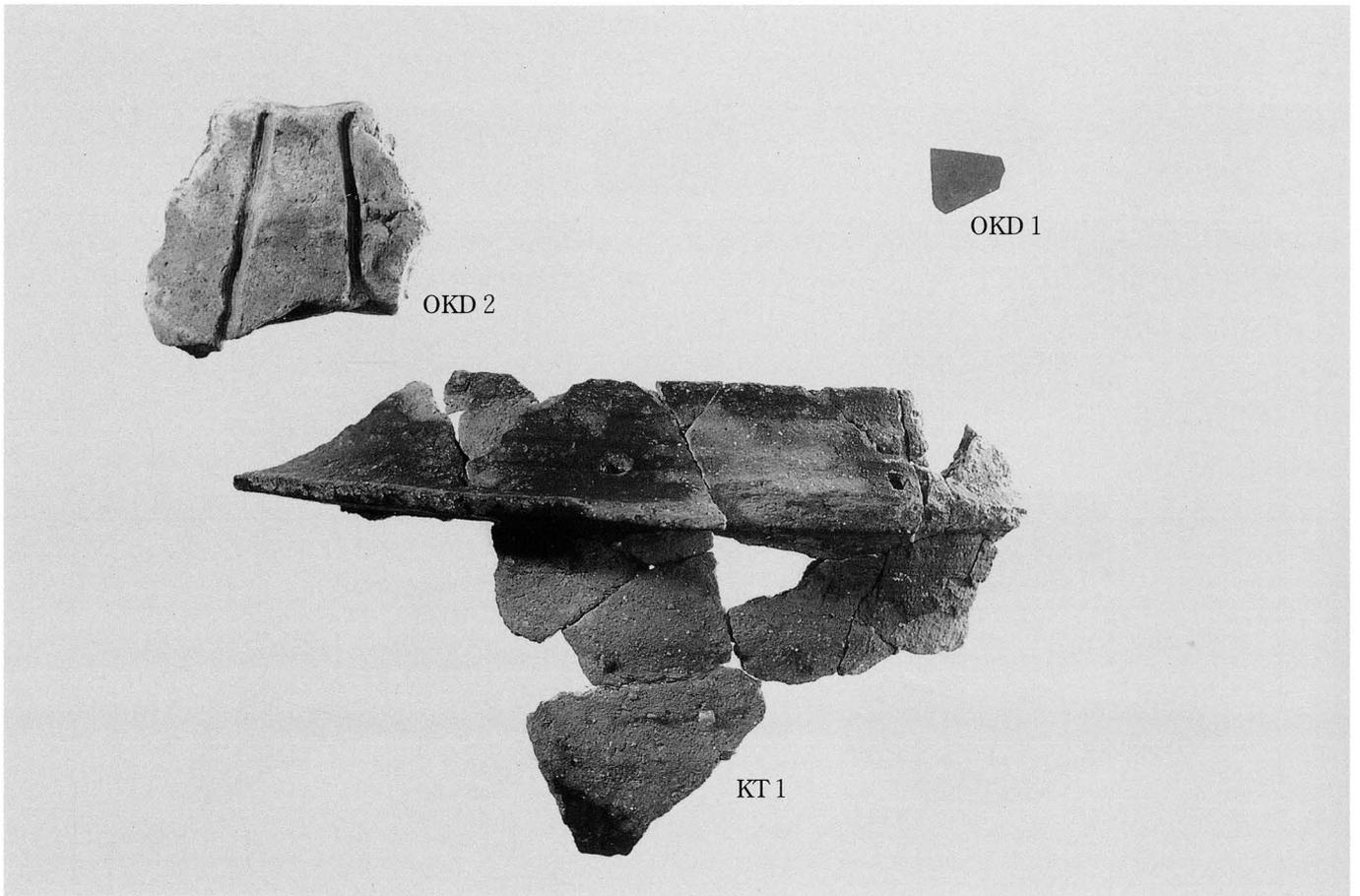
KM05-1区
(南西から)

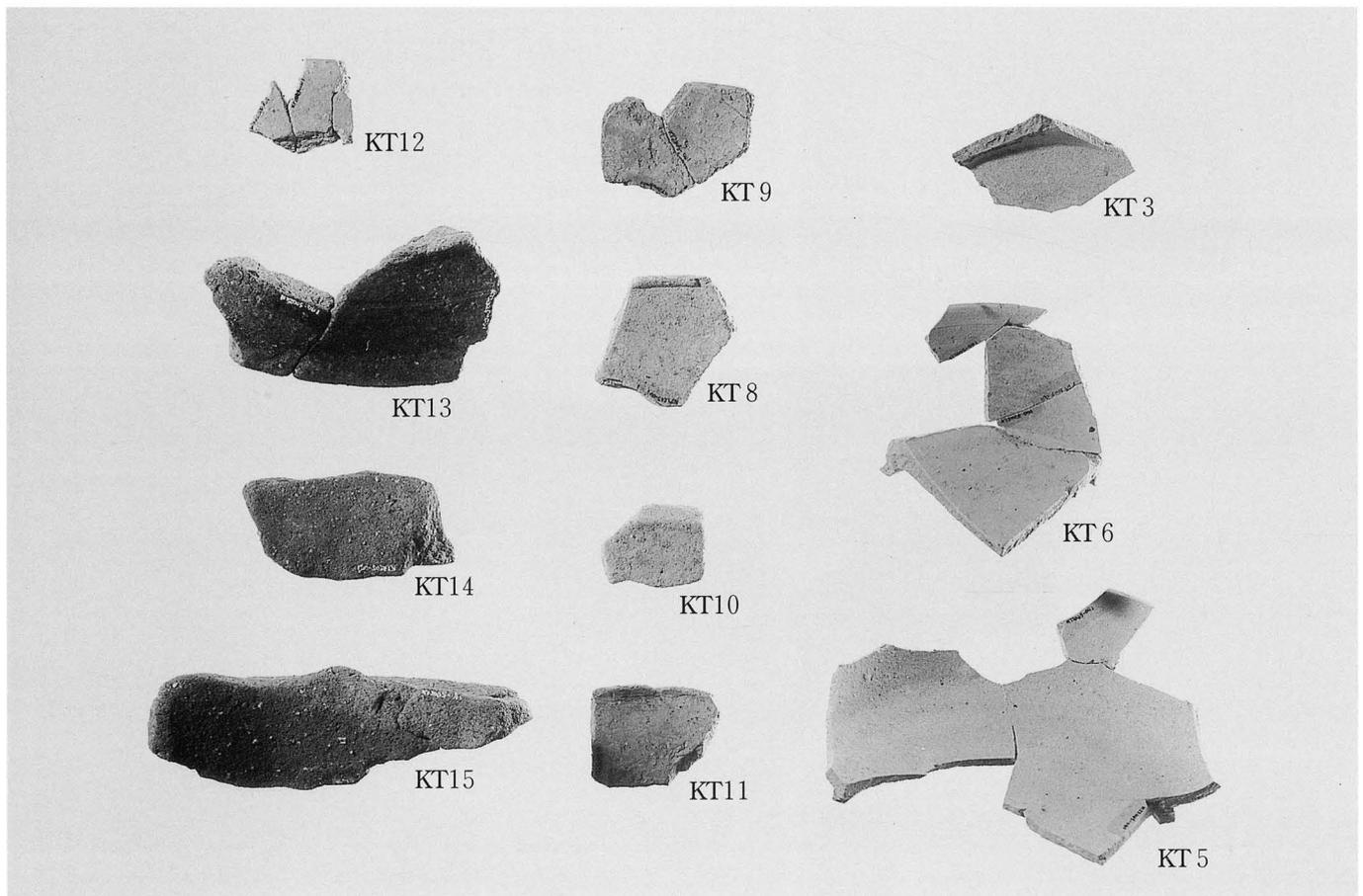
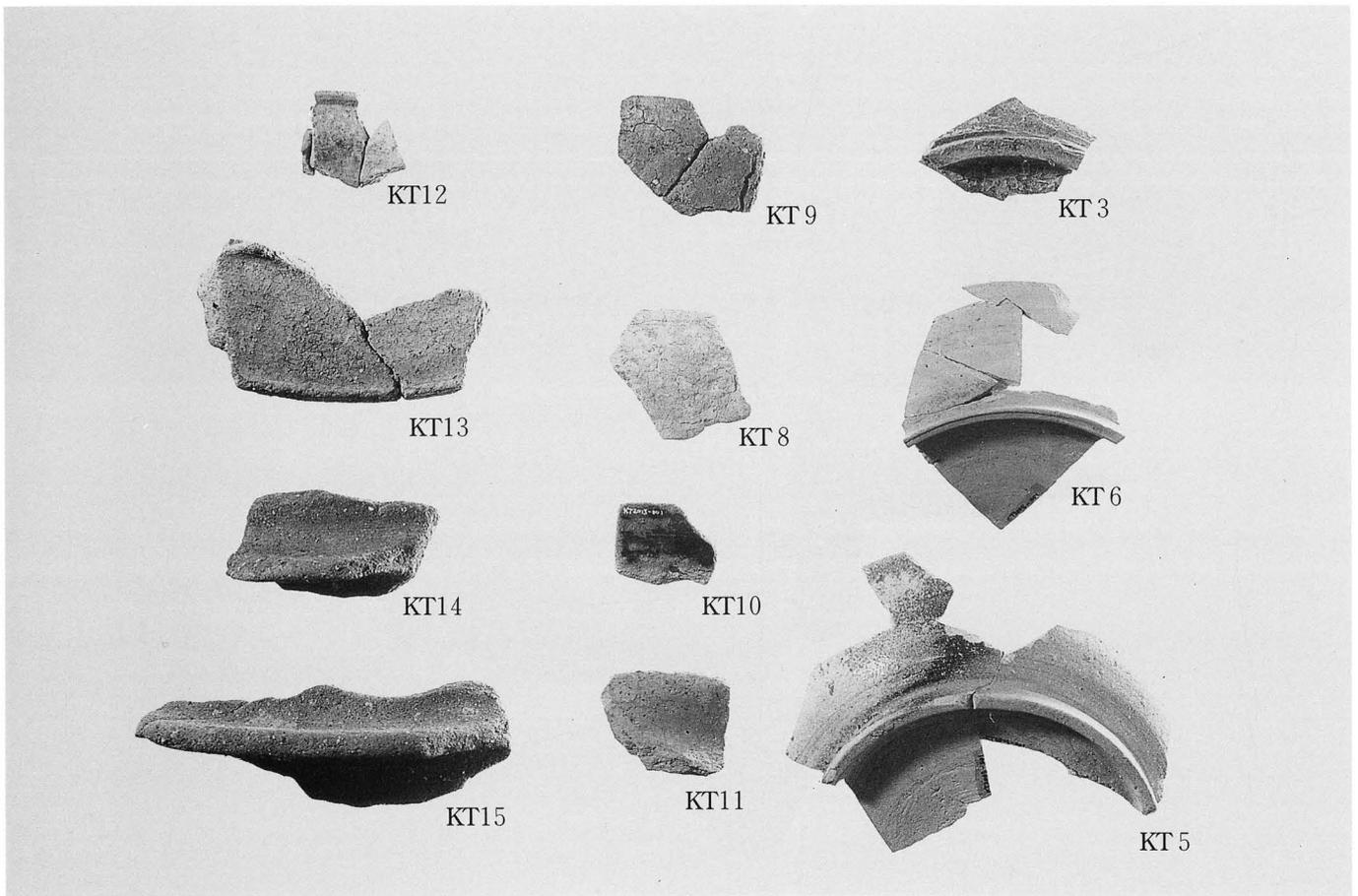


I H05-1区
第1トレンチ
(南東から)



H05-1区
第2トレンチ
(東から)





報告書抄録

ふりがな	せんなんしいせきぐんはくつちょうさほうこくしょ 23							
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書							
副書名	-							
巻次	XXIII							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第46集							
編著者名	石橋広和・城野博文・河田泰之							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590-0592 大阪府泉南市樽井1丁目1番1号 Tel.0724-83-0001							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡					
おの 男里遺跡	大阪府泉南市 男里	27228	ON	34度 21分 41秒	135度 15分 30秒	05-1 200506	3	自己用倉庫
						05-2 200504	3	個人住宅
						05-3 200506	4	店舗
						05-4 200511	3	個人住宅
						05-5 200512	5	個人住宅
04-5 200503	5	個人住宅						
おか 岡中西遺跡	大阪府泉南市 信達岡中	27228	OKW	34度 21分 40秒	135度 15分 47秒	05-1 200510	4	個人住宅
						04-1 200503	6	店舗
おか 岡田遺跡	大阪府泉南市 岡田	27228	OKD	34度 22分 49秒	135度 16分 35秒	05-1 200505	4	個人住宅
						05-2 200506	2	個人住宅
また 北野遺跡	大阪府泉南市 北野	27228	KT	34度 22分 33秒	135度 17分 05秒	05-1 200509	3	個人住宅
						04-2 200502	3	個人住宅
						04-3 200502	3	個人住宅
かみ 上村遺跡	大阪府泉南市 新家	27228	KM	34度 22分 07秒	135度 17分 48秒	05-1 200510	4	個人住宅
いし 石ヶ原遺跡	大阪府泉南市 新家	27228	IH	34度 17分 35秒	135度 17分 54秒	05-1 200510	6	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
男里遺跡	05-1	田畑	-	灌漑用井戸	-	-	-	
	05-2	-	-	-	-	-	-	
	05-3	-	-	-	-	-	-	
	05-4	-	-	-	-	-	-	
	05-5	-	-	-	-	-	-	
	04-5	-	-	-	-	-	-	
岡中西遺跡	05-1	-	-	-	-	-	-	
	04-1	-	-	-	-	-	-	
岡田遺跡	05-1	中世	土坑	瓦器、土師質真蛸壺	-	-	-	
	05-2	-	溝	-	-	-	-	
北野遺跡	05-1	田畑	中世	灌漑用井戸	瓦質土器	-	-	
	04-2	集落	平安	溝	-	-	-	
	04-3	集落	平安	溝	須恵器、灰釉陶器、土師器	-	-	
上村遺跡	05-1	-	-	-	-	-	-	
石ヶ原遺跡	05-1	-	-	-	-	-	-	

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXIII

泉南市文化財調査報告書 第46集

2006年 3月31日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会

泉南市樽井1丁目1番1号

Tel.0724-83-0001

印刷 有限会社 ヌノタ印刷工房

泉南市新家4509-4.1-205

Tel.0724-80-2760

